

俳句雜誌

令和五年一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六卷第一号

水明

2023 1月号

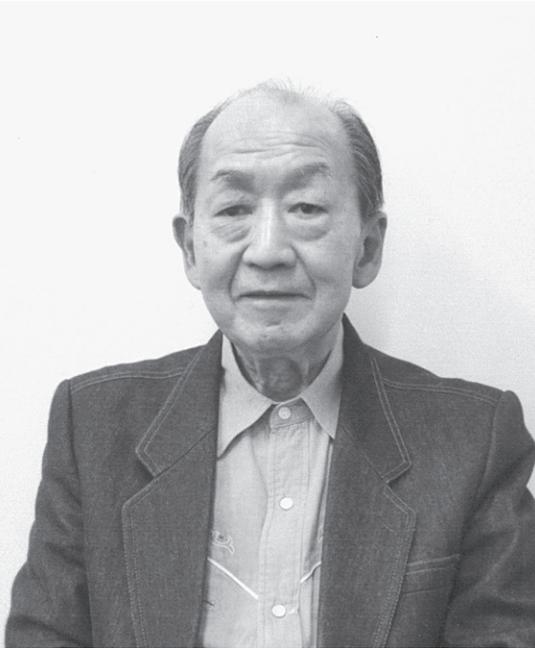


信 風 節 季

新年おめでとう

ございます

本年もどうぞよろしく



令和五年新春

主 宰 山 本 鬼 之 介

水 明

第1108号

— 華の一句 —

ま
し
ら
酒
舳
斗
雲
よ
り
楽
の
音
が

正 木 萬 蝶

唐の僧侶・玄奘三蔵が孫悟空・猪八戒・沙悟浄を従え、様々な妖魔の障碍を排除して目的の天竺に至り、大乘經典を得て帰還する、という「西遊記」の主役たる孫悟空が緊急時に使う乗物が舳斗雲である。一飛びで十萬八千里を行くというから、彼のポンドカーも敵うまい。緊急出動をサボった悟空が、舳斗雲に美女を侍らせ、猿酒の宴を催している。心が蕩ける楽の音である。(鬼之介・推薦)

水明

令和5年
1月号

今月のかな女

華の一句

気になるひと(作品)

紅葉の火(近詠)

一句一遊(近詠)

冠木門 主宰作品の鑑賞

硯箱 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を編く

見えるということ

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

大橋廸代

椎野美代子

境延昭

井口俊晴

椎野美代子 島津初花
鈴木康世 ほか

井上燈女 正木萬蝶
大場順子 ほか

石田慶子 曲淵徹雄
日高道を ほか

栗林浩

後藤章

網野月を

1

4

6

7

8

10

12

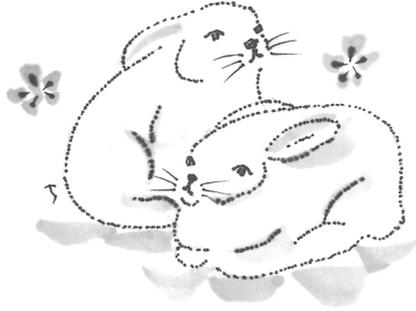
19

24

29

30

38



水明集

越田栄子 新
梅澤輝翠 暦文
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水琴窟 (水明集十一月号鑑賞)

池田雅夫

山紫集

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

俳誌望見

梅澤佐江

句集喝采

近藤徹平

水明の記事他誌転載

水明例会報・各地句会報

69

新春俳句大会・水明忌のお知らせ

新珠賞作品募集

若狭句碑めぐりバスツアーのお知らせ

風声

水明掲示板・発展基金御礼

水明運営組織・令和五年主要年間行事予定表

水明例会・各地句会・教室のご案内

後記

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

気になるひと

山本鬼之介

由緒書読む極月の蔵の中

次の間をにほはす雪見障子かな

虎落笛断つ津軽じよんがら節の撥

しめやかに蜜柑の筋を取る女
稜線は寝釈迦のかたち山眠る
行平にいま会心の冬至粥
冬川を意思持つごとく一芥
行く年や古道具屋にある秩序

紅葉の火

大橋 廻代

壇場の塔にまさりし紅葉の朱
マスクして軋む経蔵回しけり
朝もみぢ珠数屋四郎兵衛しんかんと
ナビ冷まじ「カーブ注意」を執拗に
眼底まなぞこにスカイラインの紅葉の火
店の名は「まあ入らんせ」野紺菊
小半時待たされ鹿さしむかご飯

念願の新車が届き、長女の運転で高野山へ出発。金剛峯寺前の駐車場はすでに満車だ。蛇腹道から壇場伽藍まで人の切れ目がない。根本道場の大伽藍、金堂、中門あたりは観光客であふれていた。車の御守りを賜り、みろく石本舗のかさ國の和菓子とお茶で一服。
いよいよスカイラインへ、護摩壇山も車と人の多さに素通り。雲一つない青空の下、尾根から尾根の黄葉、紅葉が車窓に流れ、錦秋の景色に酔いしれた。

一句一遊

椎野美代子

懐に寝釈迦眠らせ山眠る
山山の夜は鬣に冬の瀧
あの頃のままの土蔵や雪女郎
鱈酒の鱈の半転皆既食
ポインセチア満艦飾のリバーサイドホテル
ロイヤルブルーのインクこぼるる冬の晴
紗一師の名乗りをここに冬満月

入門当初は嶋村花水先生のご指導を受けた。かな女師の従弟に当られ遺影の師に似ていらした。浦和中仙道の東電ビル三階が教室、其処より数分足らずの陶器店を営まれ、盛夏には白いクレープシャツに桐下駄、片手に団扇。選を見て学びなさいと講評はされなかつた。唯一「○○さんならしい句」がお誉めの言葉、肖りたく熱心に学んだが二年足らずの或る日突然天國に旅立たれた。八十歳でいらした。爾来、半世紀に近い歳月が流れる。

冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

十月号

爽秋の姿見占むる女振り

和服の女性のナルシズムを感じる。「姿見」は全身を映す大型の鏡、鏡台で兼ねることもあった。椅子付きのドレッサーに変わり最近家庭では余り目にしなくなった。句の中で形あるものはその姿見のみ。少し身体を斜めに振り、一人で結つたばかりの帯を確かめぼんと叩く様子を読み手は勝手に想像してしまう。

足の指使うて物を取る夜長

器用なのか物臭なのか。何れにしろ夜長の一人、人の目を気にすることは無い。飛距離が伸びるとの触れ込みでゴルフ練習場二階「男のストレッチ」に通ったことがある。息抜きに足指のじゃんけんがあった。グーとパーは出来てもチョキは無理だった。物を取るにはチョキが出来るのだろう。

登高やいま富士塚の頂に

富士講の人たちが富士山に模して築いた富士塚、近くの散歩コースにも小さなお堂と隣合つて今も残る。せいぜい平屋

の屋根ほどの高さである。中七の「いま」が絶妙である。八十歳歳の今では決してない。登高の「いま」なのである。その達成感を汲まねばなるまい。

古書店の叩きのリズム秋の昼

当月号のタイトル「古書肆」はこの句に因る。書店には待ち合わせやちよつとした調べ物などでも世話になった。特に古書店は初版や限定刷りなど稀覯本に出会う喜びがあった。街に進出の古本専門チェーン店は叩きの攻撃は無いものの漫画本が大半、ハードカバーの書物は引取つてもくれない。古書店に限らず本屋が街から消えた頃から叩き自体をも見なくなった。なんとも懐かしい。

佳宵三更都大路を吟じつつ

佳宵は季語「良夜」の傍題、晴れた良い十五夜や十三夜に用いる。三更は子の刻、夜中の十一時から午前一時頃のこと。旧制高校時代への憧憬、弊衣破帽の蛮カラにあった硬派ロマンへの憧れである。濁声で謡う旧制三高寮歌「紅萌ゆる」が口を衝く。「吟じつつ」からは歌の前の語りの様に思う。以前テレビで観た「寮歌祭」のリーダーの演舞を思い出す。

七五調の演説口調、朗々とした名台詞であった。しかし、令和の現在にあつては迷惑防止条例に問われかねない。

十一月号

月明や庭に素面の老剣士

月は秋を代表する季の言葉であり、日本の詩歌には月に強いシンパシーがある。春夏そして冬もそれぞれの月を詠み、秋に至っては時節ごとに季立てがあり「月」は多くの傍題がある。「月明」は月の明るいことで歳時記によつては「月明り」とする。面は元より胴や籠手の防具を付けず紺の胴着と袴、背筋の伸びた剣士の姿が目に浮かぶ。手は真剣かも知れない。中学の三年間、当時竹刀競技と呼んだ剣道に励んだ。部活指導に当たられた校長先生を思い出した。

秋澄むや日脚のとどく勅使の間

邸内の奥まった部屋に斜角が低くなつた秋の日脚が伸びる景、下五の「勅使の間」が重い。勅旨を伝えるお役目の勅使、象徴と位置付けされた天皇に許される意思とは如何ほどのものだろうか。

ネクタイの売り場ひやかす龍田姫

タイトル「姫の買物」はこの句に因る。龍田姫は奈良の龍田山に祀られ秋を司る神とされる。春の佐保姫に対応される。

女性性は「首ったけ」の意を込めてネクタイを贈るという。デパート一階の正面近く、若い美人と客あしらいの良いベテランとの対の店員が対応した。中七のやや俗っぽい表現にクラブの女性あたりかと思えば龍田姫である。句に至る間の思考の飛躍に驚かされる。

菊の日や夕陽あすわる長廊下

菊の日は陰暦九月九日「重陽」の傍題。人日・上巳・端午・七夕と並ぶ五節句の中でも特にこの日宮中では観菊の宴を催し雅事が行われたと言う。以上は歳時記からの請売り。その「菊の日」に続く中七、下五の解釈に苦労する。民家もビルも平面の広がりから高層化につれ廊下そのものが消えつつある。長廊下は平屋造りの古刹か宮殿の他思い付かない。宮殿の長廊下に嘗ての観菊の宴の雅な趣を偲んでいる。

今日は八瀬あすは明日香の草紅葉

八瀬は比叡山西麓、若狭街道に沿いその住人は八瀬童子と称し重要な朝廷行事に奉仕した。明日香は奈良盆地南部、推古天皇以後断続的に宮殿が造営された。何故八瀬と明日香なのかはともかく、作者の漂泊願望であろう。

——一年の予定の〈主宰作品の鑑賞〉が三年に及んだ。

時空を超えた句の舞台設定には戸惑った。作品には客観写生に対するアンチテーゼがある。創作Ⅱ虚こそが文学だとの自負である。筆を置くに当たつてそのことを確信した。

硯箱

◆季音十一月

井口俊晴

酔漢二人袋小路の長き夜

境 延昭

酔っ払いが二人、駅前にある飲み屋街の奥まった店でくたを巻いている。夕方やって来た頃は真面目なサラリーマン風だったが、あれから数時間、終電が迫っている今は、もういけない。一人はネクタイがほどけて垂れ下がり、もう一人はズボンを捲り上げ、むさ苦しいのなんの。言っていることも支離滅裂になってきた。どうやら話は袋小路に迷い込んでしまっている様子だ。お客さん、このまま深夜タクシーで帰るおつもりですか？

運休の放送しきり萩の雨

島津初花

秋雨前線の活動が活発になって、出かけようとすると決まって雨になる。テレビをつけると、超大型台風の接近による鉄道の運休について、アナウンサーがしきりに喋っている。

どこだかの温泉地は洪水で床上浸水らしい。行楽シーズンだと言うのに、お天気の様子は何を考えているのだろうか。庭では満開の萩の花が雨に打たれている。

雁渡しなべて海向く異人墓

梅澤佐江

雁が北風に乗ってやって来た。極寒の地から逃れ、暖かな日本で冬を越すためだ。彼らが飛んで来た水平線の遥か彼方には、凍てつくシベリアの大地が広がっている。そして、この外人墓地もそうだが、いわゆる異人さんのお墓は必ず海が見える場所に立っている。雁はいつか北に帰るが、遠い外国からやって来て、ついに祖国に帰れなかった彼らは、きょうも海の見える丘の風に吹かれている。

故郷を語り尽くさむ温め酒

池田雅夫

お酒はぬるめの燗がいい…、艶歌が聞こえてくるようだ。

温め酒がたまらなく美味しい季節。ゴルフの帰りに馴染みの店にちよつと寄つて、いつものように思い出話に耽る。津軽が故郷の彼は、今でも抜けない東北訛りで幼い頃の話を始め。吹雪の夜は、雨戸の隙間から吹き込む雪で布団の襟が真っ白になったとか。岡山の農家で育ったもう一人は、畑を荒らしに来る憎たらしい猪の話。話しても話しても語り尽くせない故郷の思い出。

板橋のせせらぎやさし赤とんぼ

井関礼子

爽やかな秋の昼、日に焼けるといけないと思い、小さな麦わら帽子を被つて散歩に出た。お目当ての公園には、近くの小川から水を引いて、ちよつとした沼というか、池があつて、向こう側に渡れるよう板橋が架かっている。そのせせらぎの上を、二匹の赤とんぼがぐくついたり、離れたりして飛び回っている。こんなことが、遠い昔の子供の頃にもあつたなあと、それは優しい気持ちになつたものだ。

武蔵なる国を一閃いなつるび

曲淵徹雄

広大な関東平野を稲妻が走り抜けた。閃光と、それに続く雷鳴。古代縄文の昔から広がる武蔵の国を、一瞬のうちに白昼のように照らし出した。大和朝廷の時代に勢力を誇つた豪

族の古墳や、あるいは、戦国末期の忍城（のぼうの城）のあたりまで、真昼の明るさに輝いた。雷が多い年は稲が豊作だと言われる。ぜびそうあつて欲しいものである。

秋涼し薬師如来の薬指

檜鼻ことは

薬師如来は「薬師瑠璃光如来」とも呼ばれ、東方浄瑠璃世界の教主。西方極楽浄土の教主・阿弥陀如来が死後に安らぎを与えてくれるのに対し、現世に願いを叶えてくれる仏様だ。白状してしまつと、これはさつき辞書で調べたばかりの知識だ。それはともかくとして、奈良・西の京にある薬師寺は、私の大好きなお寺である。秋空の下に立つ東塔と西塔の美しい姿を見ると、「奈良に来たなあ」としみじみ思う。金堂におられるご本尊、薬師如来の慈悲に溢れた薬指、本当に癒されます。

入院日いまだ決まらず十六夜

葛城千世子

体調が優れない母親の入院日がなかなか決まらない。旧暦の八月十六日は「いざよい」だそうだが、治療を急ぐこちらの気持ちを知らぬげに、空きベッドがないとか、病院がぐずぐず言っているのは、満月より出が遅れる十六夜の月そのものだ。このままでは時間がどんどん経つて、手遅れにならないか心配。少しでも早く病人の苦しみを和らげて欲しい。肉親の思いには切なるものがある。

季音雪



茶の花 椎野美代子

花鉢を高きに吊れり紅葉期
鳥が空飛びさうな晴文化の日
文化の日電子辞書より虚子の声
想ひ描くルーツ初冬の皆既食
ふかぶかの薬に沈みしお茶の花

落葉 島津初花

薬師如来に一灯ささぐ秋時雨
軋む戸を開けてガイドの石露の花
Aランチは紅葉の走り老舗宿
豊かなるダム湖に集ふ鴨百羽
言の葉を積み上ぐるごとと黄落葉

半跏趺坐 鈴木康世

半跏趺坐の瞑想に馴れ冬に入る
メモの癖未だ変はらず冬に入る
木の葉散る通小町の能管に
石畳に石の歲月木の葉散る
手書きしか出来ぬ不器用木の葉髪

榎櫃の実 十倉和子

助手席の唐梨の尻定まらず
廃寺なる大山茶花に息を呑む
散る木の葉ひとつふたつは鳥になり
木守柿夕日とらへて透きとほる
香を愛でて武骨なくわりんの実間に

耳聡し 永野史代

読経の声低くあり冬はじめ
山なみの重なるふる里冬浅し
耳聡く夫の靴音聞く霜夜
母手作りの人參甘し夜勤明け
夫よあなたへ生涯一度の毛糸編む

短日 田寺玲子

石路の黄へ朝の光のまつすぐに
放流の陛下の御手を冬しづく
奥嵯峨の秘仏をろがむ片時雨
短日の牛舎にかかる血統書
黄落の中を闊歩の御堂筋

小春日 西山貴美子

花手水 星野和葉

べからずと言はれれば振れ干大根
干大根の向き直しても直しても
切り干し買ふ何が風袋の何グラム？
言問はば笑みの戻りし石路の花
小春日のサスペンダーがゆるみけり

空仰ぐ庭師の茶どき小春かな
あやふやな定石を打ち冬うらら
碁会所に立ち見の男小六月
冬ざれやとりわけ派手に花手水
冬ざれや顔あるポスター飛びゆけり

山茶花 波多野寿子

後ろ向き 茂木和子

凧や酒器を抱ふる道祖神
川底のきれいな小石小六月
風と戯れ柿の落葉の踊りかな
山茶花や懐紙とり出す音しづか
追憶の思ひほのぼの冬すみれ

故里はそろそろ綿虫湧く頃か
綿虫の仄めく色を掌に囲ふ
「ありがたう」の言葉を紡ぎ毛糸編む
盛り上がる話のそとに毛糸玉
毛糸編む昭和を生きし後ろ向き

松手入 矢作水尾

花のごと父に抱かるる七五三
松手入終へたる場所の松の影
先客の椅子のぬくもり冬日和
棕百羽史跡の杜に突き刺さる
出港の水脈はれやかや秋澄めり

山眠る 山中みどり

庇まで薪積み上げし猟師小屋
熊除けの鈴を鳴らして配達夫
さんざめく星々のうた山眠る
密やかに獣の気配山眠る
滅びたる獣等の霊山眠る

紅白で祝ぐ 柚木治子

早稲の飯神事のやうに箸を取る
張り替へし障子明りや嫁迎ふ
七五三魔除けの紅を濃くさしぬ
半衿の白さつつじの帰り花
行く末を白きベールに冬の霧

身ぎれいに 由良ゆら女

大寺の屋根金色に翁の忌
にぎり江の水華やかに鴨の陣
身ぎれいに過ごす余生や姫椿
七五三母さん何んだかいにほひ
切り干しを作り置きして南座へ

赤くなる人 網野月を

歩 幅 石山かつ子

待つ希望待たれる希望初時雨
銀杏落葉再会果たす最終回
独白の有効期限返り花
翼の中へ何か隠して冬の鳥
悴け鳥を励ましてゐる悴け人

抜け出しさうな欄間の飛天黄落期
黄落やのぼりくだりの石の磴
草もみぢ客土の土を山積みに
城跡に煙ひとすぢ冬うらら
老いてなほ歩幅あはねど冬うらら

舫ひ船 石井喜恵

小春猫 大橋廸代

冬の霧交互に揺るる舫ひ船
静止画となりたる曠野冬の霧
月天心影先立てて坂下る
後手に閉める指先白障子
そぞろ寒人に少しの運不運

小春猫狩りしもぐらを須弥壇へ
ステージ4らしと耳打ち神農祭
拾ふてくれと石榴に呼ばる一人旅
白杖を馱へみちびき姫椿
介護弁当とどく濡れ縁お茶の花

迷ひ込む 大村節代

膏藥をゆつくり剥がす霧の朝
数へつつ登る石段初しぐれ
冬の霧見知らぬ町へ迷ひ込む
村時雨ひとりの幅の橋揺るる
兜煮の眼窩見詰むる冬の宿

行き合ふ 小倉倭子

酉の市客を搔つ込む生蕎麦店
緋毛氈に七五三と掛け並ぶ
冬うらら雅楽に誘はれ宮参り
行き合うて目元の笑みよ冬うらら
碧空に浸る御神木冬麗

石路の花 栢尾さく子

秋狂言忘れかけたる美辞麗句
身にそぐふ花を探して秋の蝶
秋日暮生きているもの死んだもの
行く秋を使ひきりたるオノマトペ
石路の花咲き身のうちの緊る朝

敗 荷 菊池ひろこ

敗荷の池にさざ波人に悔
残照の敗荷の水浅からむ
敗荷や真西なるやもわが背後
破れ蓮鐘の余韻といふ無風
敗荷の昴る頃の上野駅

冬立つ 五明昇

来し方を木の葉が埋むる曲輪跡
海鳴りを遠音に加賀の燕鮎
熊笹に音の明るき初しぐれ
初しぐれ竹の蓋置く車井戸
初霜を踏み早立ちの行者講

お湯注ぐ 境延昭

お湯を注ぐだけの味噌汁文化の日
新蕎麦やなべて蕎麦屋は無愛想
黄落やニンフの像が跳びたがる
客演の新派の女優竜の玉
冬晴や石の蓋する庭の井戸

創刊40周年記念 2号連続企画

特集 俳句の未来予測

赤羽根めぐみ／荒川英之／大谷弘至
家登みろく／岸本尚毅／黒岩徳将
仙田洋子／高田正子／高柳克弘
鶴岡加苗／照井翠／錫田智哉
西山ゆりこ／二ノ宮一雄／波戸岡旭
藤本美和子／山下知津子

關巻頭三句

關好評連載

池田澄子

南伸坊

宮田正和

筑紫磐井

小林貴子

ねこはい

すずき巴里

坂口昌弘

野木桃花

忘れ得ぬ俳人と秀句

森岡正作

句の手触り、俳人の響き

關俳句と短歌の10作連続

大西朋

西村和子

神作研一

久々湊盈子

てのひらの江戸
——古典籍を旅する

關今月の華

藤村公洋

桑田真琴

俳句のつまみ

日野百草

二ノ宮一雄

一望百里



2023年2月号

1月20日発売
定価1000円(税込)

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

百合鷗

井上燈女

稜線へすべり込みたる冬夕日
ホテルの灯消えて出揃ふ冬銀河
禅寺の木の実庇を打つしじま
川筋を白く引き締め百合鷗
河口湖の紅葉祭の中にある

金斗雲

正木萬蝶

ピンテージジーンズの膝やれはちす
鞍馬には晴れぬ魂棲む木の葉雨
壺庭はわが浄土なり木の葉焼く
ならぬひとへ私語わたくしごとめく木の葉降る
ましら酒舳斗雲より楽の音が

貴船路

大場順子

冬霧や鈍色を増す日本海
手に受けし木の葉に小さき山の声
しぐるるや墨絵さながら貴船路
裸婦像の半身ぬらし片時雨
けら叩くほどに晴れゆく山の霧

そぞろ寒

内田恵子

天鵞絨の淑女の帽子そぞろ寒
宙に船漕ぎだす心地鰯雲
初霜やサラダにはらり粉チーズ
初霜や色を失ふ里の径
綿虫や目鼻の模糊と石地藏

無言劇

池田雅夫

霜月やまたたく星の無言劇
古文書を繙く書窓冬日濃し
炬燵据ゑ喜怒哀楽の機転かな
咳の子に代つてやれずもどかしき
寒林の直立不動尊徳像

立冬

森本早苗

立冬の明石の浦へ稚魚放つ
立冬の勇姿百隻明石の門
のり弁といざゴンドラへ冬紅葉
山茶花の純白零す空き家かな
太閤の茶会の寺や散紅葉

白障子

梅澤佐江

彩雲を被かく朝や帰り花
冬晴やシテイポップに酔ふラヂオ
黄落の中は神域吾に光景
松風に雨の匂へる七五三祝
白障子夕日の影のやはらかし

空を嵌む

丸山マスマ

啄木鳥の音撥ね返す空の張り
敗荷の沼そちこちに空を嵌む
暮の秋ヘッドライトに浮かぶ雨
冬の霧沈下橋行く旅商人
山城の跡を呑み行く冬の霧

手締め

鳥羽和風

牛売れて馬喰の手締め牛鍋屋
暗がりの味こそよけれ夜鳴蕎麦
御明かしがほのぼの包む林檎かな
長男は農につれなき小六月
山茶花の蒼いつ咲くいつ散らん

初冬寸景

松井由紀子

尿せし猫駈け戻る冬の朝
冬天へあけぼの杉の焰ほら立つ
懐郷は母の口ぐせ冬の虹
ともに古りし経師に頼む襖替
カデンツァの余韻家まで冬銀河

冬構

高島寛治

全集の順序を正す文化の日
植木鉢廊下に並べ冬構
愛想の良き猫と会ふ小春かな
帰り花今なほ残る古街道
冬の雷荷揚げを急ぐ貨物船

夜鳴蕎麦

宇田白鷺

手をかざす神社人波菊日和
寺参り終りてよりの障子貼り
枝打ちにしはし手を組む小春かな
夜鳴蕎麦今何時とは江戸落語
初霜や若狭秘仏の縮こまる

私のベント

藤澤喜久

鎌鼬と愛車の傷に嘯きし
山茶花や私のベントは車椅子
痛み止め喉元過ぎて神無月
わらわらと急くな木の葉よ女坂
木の葉散る安堵の土に還るまで

冬の月

井関礼子

冬の月天体ショーを小半時
冬の月衛兵めきし星ひとつ
冬の月外に出で仰ぐ幾度も
冬の月峡に住まふも半生を
町騒を遥かに仰ぐ冬の月

赤蜻蛉

松宮保人

無住寺の庭一隅に乱れ萩
アマチュアの撮る構へなり秋夕焼
老いて猶色変へぬ松海の寺
山頂の安堵の石や赤蜻蛉
新館に木の香りして秋時雨

初冬

荒井俱子

朝刊にありし湿り気今朝の冬
異国語のとび交ふ古都や冬初め
急逝の友を恋ふれば雪螢
薬屋の来る頃合や花八手
碑に社の由来木の葉散る

鷹

山田美佐尾

米磨ぎの外井戸いまも一葉忌
ままならぬ寝癖の髪や一葉忌
ぼつくりの鈴の音やさし七五三
湖底にはマリモ静かに冬の月
精悍な目を持つ鷹の舞台は空

白菜 福田千春

新米とぐ後姿の弾みをり
敗荷や輪廻転生われもまた
我が頭より重き白菜届きけり
かぎ針で繕ふジャケット冬浅し
庭箒出番待ちたる今朝の冬

冬うらら 森川義子

軽やかに釘打つ音や冬うらら
知恵の輪がするりと抜けて冬うらら
息深く吐いて帯解く七五三
気配なき公園事務所黄落期
雲抱く湖面の山や黄落期

高舞ふ鷹 井上玲子

妙高山の霧解き放つ鷹一羽
岩頭の空を高舞ふ蒼鷹
石路の花庭の要の石に添ふ
息白し磨き上げたる大玻璃戸
枝折戸を開けて友待つ藪柑子

そぞろ寒 井口俊晴

初霜やカーブミラーに登校児
そぞろ寒再入院の報せ受く
老犬のにじり寄る晩そぞろ寒
解体の軒端に垂るる烏瓜
国宝の天守を仰ぐ枯蓮

入りがたる 渡辺舍人

新米を喰ふ膝窪に猫入りがたる
寒こだまバックミラーに入りがたる
関東煮じやこ天好きでありし妻
演歌唄ひ寒風坂を八合目
伸し泳ぐごと寒風を歩くかな

地方都市 町野広子

そぞろ寒破つて捨てる古写真
秋寒し身の節々が音を出す
紅差さぬ暮しにも慣れ暮の秋
暮の秋閉店早き地方都市
秋暮るる旅の土産に乾き物

白山茶花

川崎道子

冬紅葉戸籍にひとり男の子ふゆ
銀杏黄葉乳房の絵馬が重なりぬ
神の留守持ち上げられぬ願ひ石
倭歌のこる木簡返り花
白山茶花ここは平家の裔の里

館山寺

松本光子

借景の玻璃戸拭く尼初しぐれ
初時雨諏訪の末社の笛太鼓
初しぐれむらさき濃き館山寺
遠景や赤城しぐれか峠越ゆ
珈琲一口妙義三山神の留守

姉入院

松山清子

初スマホ鳴るを怖るる冬はじめ
月食を見むと初冬の門を出づ
どつしりと居座るゴリラ冬に入る
髪結ひて少しはにかむ七五三
布団重し姉入院と聞きし夜

冬桜

野口和子

新蕎麦の札の真白や縄のれん
配達の古本十巻冬はじめ
園児らの声に開くや冬桜
月食に心浮きたつ冬の夜
山の子へスクールバスや冬浅し

山茶花

西浦千枝子

転勤の子より届きしラフランス
此の区間幅員減少ざくろの実
山茶花の垣根の中に母独り
銀杏黄葉スピード落とす走行車
此の沿道豪邸多し金木犀

落葉船

上戸千津子

気儘旅帰ることなき落葉船
山茶花の所狭しと咲きこぼれ
金色に染めて銀杏に威風あり
風戯へ銀杏黄葉の名残舞ふ
茅廩家落葉鏤め狐でも

季音花

季節の移ろひ

石田慶子

敗荷や世論調査の円グラフ
敗荷や優しい人の下手な嘘
古書市の読めぬ字あまた文化の日
冬浅し母を連れ出す車椅子
冬浅し回覧板の立ち話

面の眼差

曲淵徹雄

梵鐘と撞木の間合秋の風
待つ人のをらぬ停車場秋の声
能面の冷めし眼差冬近し
墨堤に荷風の背中空つ風
時雨るるや田圃にでんと墓一つ

冬の息 日高道を

茜さす大和三山草紅葉
空青し百万石の冬構
工場へ出勤の列息白し
我が庵は色こそ無けれ残る菊
場違ひなをとこがひとり西鶴忌

冬に入る 河野はるみ

敗荷の下は竜宮魚の宴
不忍はアーバン色に敗荷
友の句集胸あつくして庭枯るる
山裾に色香残して秋暮るる
雲水の門口に立ち冬に入る

湖月 野田静香

我が影の長きに語る冬田打
寒林の闇を浮かせる湖月かな
タップダンス坂をこるがる柿落葉
はつふゆや地下鉄出口あめにほふ
帯解や簪ゆらす杜の風

冬に入る 青木鶴城

見送りの手に包まるる手や夜寒
冬の入り出て行くだけの出納簿
帰り花口の達者は親ゆづり
深川は昔留めず芭蕉の忌
表札に名前加はる神無月

冬初め 大塚茂子

凧や文鎮のごと鳥ひとつ
五箇山にけぶる民煙ごごめ雪
伊香保街下駄音響く冬初め
百穴にうすき光や冬初め
尾曳きの渡し振袖も乗る小春かな

野辺の墓 近藤徹平

みのこづち香煙上る野辺の墓
薯蕷汁丸子の宿の由緒書
大使の馬車は行幸通りや黄落期
冬灯客待ちつづく占ひ師
相客と翔平談議おでん酒

相輪 保坂翔太

南都なる対の相輪秋澄めり
空澄むやぐんぐん昇る熱気球
百歳の喉鳴らしけり濁り酒
立役の青眼の太刀菊人形
合掌の家々つなぐ刈田道

小春日 原田秀子

小春日や水切り三つ五つ六つ
御目文字の叶ひし老師翁の忌
石路の花八丈絹の黄にも似て
千本のバラより愛しき冬薔薇
カルメンの情熱秘めて冬薔薇

小鳥来る 檜鼻ことは

ひと仕事終へて小鳥の来る暮らし
通勤の内ポケットへ赤い羽根
欲張らぬことが肝心葉掘る
艶やかに朝の馳走や茸汁
なんとこのう明るき祠石路の花

柳散る 笹本啓子

柳散るむかし瓦斯灯ありし街
小春日や外湯巡りは三軒目
筆談で応ふる夫や冬初め
大寺の団扇太鼓や木の葉落つ
綿虫や空家ばかりのニュータウン

山茶花ひらひら 石川理恵

山茶花のこぼるるままの染物屋
山茶花ひらひら沈黙に耐へ切れず
「旅行支援」利用しますか神の旅
あの人が苦手人参より苦手
霜解や一張羅よごさぬやうに

名所旧蹟 田中章嘉

室咲きの花束降す父と子と
日溜りの鬼門に咲くや帰り花
しぐるるや廂に狭し吊し柿
酉の市雑踏の中に救急車
人混みの名所旧蹟文化の日

息白し 熊倉千重子

石庭の渦にほっこり冬椿
七五三児等に祝詞の長すぎて
張り込みの刑事襟立て息白し
ジョギングの抜きつ抜かれつ息白し
赤々と夕陽重ねて藪柑子

牡蠣 野平美紗子

荒波を受けて栄ゆる岩の牡蠣
釣舟の北風受けて鴉の海
大櫓全容黄色に染まる秋
吹かれゐる破れ蜘蛛の囀冬はじめ
銀杏を探し小春の散歩道

少欲知足 松島寛久

少欲と知足の小春婆の里
生涯の部活の友よ秋偲ぶ
乳しぼる牛反芻の小春かな
初霜や薪の暖とるウクライナ
山門の葦酒許さぬ桐一葉

人參のスープ

瀬戸 雄二郎

人參を残し生徒の立たされて
人參のスープ深夜の麻雀荘
洋画見てきて人參のスープ熱し
初霜や清瀬に結核療養所
水仙揺るる風有る時も無き時も

冬のダム

飛永 鼓

産直の箱解く笑顔林檎かな
林檎村頬つべの紅い児はいない
伝説を沈めしダム湖冬に入る
樅の木のに伝へし冬の原
山茶花のはらはらと敷き人住まず

冬 日

宮崎 紫水

冬の朝児童の列にリズムあり
校庭に声遊ばせて冬日かな
冬の暮街ぼつぼつと灯り置く
本捲る音かさこそと冬の夜
三寒はペン持ち四温筆を手に

氣候変動

宮崎 チアキ

石鹼のさまざまなるや文化の日
真つ赤な林檎一つで足りる吾が暮し
子の寝息そつと閉むるや白障子
船頭の唄の響くや紅葉川
暖冬を愛づるも地球温暖化

銀杏黄葉

中野 疆

体温を計るならばはし秋の夜
椅子に置く明日の真白き冬帽子
銀杏黄葉通り抜けつつ何祈る
マスクして街は秋思の顔となり
腰痛に苦しみ見上ぐ鱗雲

上野公園の初冬

下川 光子

外に出でよ上野のゴリラ冬うらら
ゴリラ待つかメラ目線や石露の花
小春日の少し離れてパパゴリラ
水鳥のつかず離れず逆らはず
冬ざくら白木の塔の静もりぬ

今朝の冬 葛城 千世子

寒さややあちこちもげる術衣着て
そぞろ寒顔面覆ふ布青し
手術中のとびかふ言葉身にしみて
ぐぐぐとカテーテル入る秋寒し
治療後の痣のうする今朝の冬

神の留守 後藤 綾子

ゆるやかに流るる綾雲神の留守
月蝕のはりつく車窓冬の旅
綾取りのいつたりきたり限も無し
暮の秋街角で聴くテナーサククス
街中に響く川音散紅葉

(令和四年十二月号分)

今年米 瀬戸 雄二郎

新米は薪で炊けとは言ひ出せず
新米は旨いぞ古米は消えるのみ
赤い羽根外してポルノ映画館
善人ばかり揃つて議員赤い羽根
悪人で終へる覚悟し赤い羽根

俳句

2月号
予告

1月25日発売

予価 1,100円(本体1,000円)®

特別作品 小澤實・西山睦・佐怒賀正美

実作特集

しらべを 整える

▽総論 しらべを整える重要性
▽実作指南 しらべを作る様々な要素／しらべを推敲する
▽鑑賞 しらべのよい愛唱句50句

対談

高橋睦郎×安里琉太

12月号「作品特集 沖縄を詠む」を受けて考えること

後鳥羽院遷幸八〇〇年記念シンポジウム

ターニングポイント うたの島

付録

季寄せを兼ねた 俳句手帖 春

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

『水明誌』を繙く（水明十一月号）

栗林 浩（円錐、小熊座、街、）
遊牧

石仏に泪の跡や雁渡し 正木萬蝶

妻ひとり炎天の中帰りゆく 元田亮一

世に夜泣き石があり、泣き仏もある。遠州掛川の小夜の夜泣き石が有名だが、ほか各地にそれぞれの伝説をもとに伝わっている。泣き仏も、法隆寺のそれは絶叫に近い泣き仏であり、一方、広隆寺のそれはこの句のイメージに近い。頬に指をあてておられるお姿が、あたかも泪を拭いているかのように見えるのである。だが、正木句のそれは、夜泣き石でも泣き仏でもなく、路傍の古い石仏なのであろう。

泪の跡とあるが、濡れている訳ではなからう。歳月を経て石仏は風化している。表情も、笑っているのか悲しんでいるのか判然としない。正木さんはそれを泣いていると見た。己の心情がそう見せたのである。目の下の部分が剥落しているので、泪跡のように見えたのか。空には雁が渡ってくる頃の北風が吹いている。泪は乾いてしまっただけではないが、その跡を泣いていると感じたところから「詩」が生まれる。そうして、なぜお泣きになっておられるのかを、わが身の来し方に重ねながら、思いを馳せるのである。

妻が一人で（多分とほとほと）炎天の中を（家へ）帰ってゆく。ただそれだけしか書かれていないのだが、それ故に、読者は作者の色々な背後事情に想いを馳せる。

読んだ瞬間、私は訳もなく、特高に囚われた渡辺白泉を思った。遠くから京都までわざわざ面会に来た妻が、いま打ちひしがれて帰って行くのである。もちろんそれは勝手な場面想定であって、元田さんはそんな状況下にはない。私は次にこの句は白泉よりも病の石田波郷の状況に近いのでは、と思いかえした。心情は書かれていないが、妻に対する思いは伝わってくる。妻の歩く姿を「とほとほと」と私は書いたが、テキストにはそうは書かれていない。読み手の第一発想はなかなか拭えない。「炎天」という措辞から、作者が妻に対し「済まないなあ」と思っているという想像することはごく当然であろう。俳句の鑑賞は、正解を求めることではない。作者の作句意図とは別に、読者が構築した世界の中で、思いが広がっていく。それがこの句の宜しさである。

見えるとくついつと

(水明塾二〇二二・十一・三講演より)

現代俳句協会幹事長

後藤章

今日は、虚子の『新歳時記』の例句の分析から見えてくるいくつかの特徴と、そのことが示す虚子の俳句に対する考え方について述べ、後半はそのことを脳の癖と関係させて述べてみたいと思います。

虚子の『新歳時記』の特徴

『新歳時記』（三省堂）の初版は昭和九年、改訂版は昭和十五年です。増訂版初版は昭和二十六年です。その後改訂はしていないようです。

この歳時記には他の歳時記と違った特徴が三つあります。一つ目は季節の並びです。他の歳時記と違って一と月の季節の並びが季節の移りに沿って出て来ています。他の歳時記は殆ど、時候、天文、地理、人事、宗教、植物、動物などに分類されていますが、この歳時記は一か月の間にだいたい自然界に出現してくる季物の順に並んでいます。同じ事を西村睦子さんが『正月のない歳時記』という本でいってます。ただ

彼女のいつていることと違うのは、彼女は、虚子は一ヶ月の中に季語を「雑多に題を並べ簡潔な解説を加えている」と書いていますが、これは間違いです。十分に配慮して並べているのです。一つには吟行に役立つように作ったと思いますが、実は季語の配置については虚子の深い考えが籠められていると私は思います。虚子は昭和八年まで改造社の『俳諧歳時記』の春と冬の部の編集を担当していました。しかしこれは普通の歳時記と同じで項目ごとの分類型でした。それなのに翌年の九年に虚子は『新歳時記』を出しました。これは大きな俳句界への挑戦だったと思います。俳句に対する考え方の大きな違いを社会に示したのです。

季節の移ろいはアナログに遷移していきます。決して立夏になったからといって急に自然が夏になるわけではありません。順々に春から夏の様相に移っていくわけです。その途中には春のものと夏のものが入り混じります。ですから虚子は季節の並びも自然の移り変わり通りに並べるべきだと思っ

たのです。虚子にとって季題は一つ一つが独立したものではありません。流れです。であれば博物学のように分類されているのは不自然なのです。これはかなり俳句に対する考え方が、虚子とそうでない人では違うことを表していると思います。極端に言えばデジタル思考とアナログ思考の違いです。

近代文化はデジタル思考です。そうでなければ科学は発達しませんでした。17世紀のニュートン力学の成立、デカルトの方法序説などで西洋では科学的真理という考えが、それまでのキリスト教中心の哲学を凌駕して支配的になっていきました。そして18世紀、19世紀の産業革命などを経て、ニュートン力学を元にした実証科学が世界の標準的な思考法になりました。そんなとき日本は明治維新を迎えて、明治の青年は科学的思考に染まりました。子規もその一人です。だから12万句もの俳句分類をしました。しかしその弟子の虚子は違ったようです。分類は人間の知恵ですからどうしようもありませんが、虚子はその文化の中でいささか抵抗を示したのです。

二つ目は『新歳時記』の虚子の例句の特徴として、季重なるの句がかなりあるということです。先に言いましたが、虚子の考え方は自然は移ってゆくものだという考えです。だから一句の中に季節の移りを示す季題が二つ以上入っているもおかしくはないのです。そしてこれが恐らく虚子独特の写生の考えを生んだのです。この点は後で触れます。

虚子に次の句があります。春草の夏草となる頃はよし（句

日記昭和十五年）。この句は虚子の自然に対する考え方を象徴している句です。皆さんは季重なりではないかと思うでしょうが、虚子は季重なりを全然気にしないでもいいといっています。

ではまず虚子の季重なりについての発言を確認しましょう。『俳句とはどんなものか』（大正二年）の中の文章です。虚子は嵐雪の句を引き合いに出して次のようにいっています。

梅 一輪くほどの暖かさ 嵐雪

この句は「梅」が季題であります。「暖か」というのもやはり季題でその方は「時候」の方に属するのであります。この句のごときは季重なりというものでありますが、季重なりはいけなないと一概に排斥する月並宗匠輩の言葉はとるに足りませぬ。季重なりはむしろ大概な場合さしつかえないのであります。（中略）

また春季と夏季との季重なり、冬季と春季との季重なりというような場合も往々にしてあります。それらも大体においてさしつかえないものとお認めを願います。それで私は従来 of 俳句の規則にさからって、一つ断案を下しておきます。

季重なりは俳句において重大な問題ではありません。

次の証拠として、虚子の歳時記に出てくる例句の中で、季

重なりがどれほど出てるか見てみましょう。併せて句集『五〇〇句』での出現比率を見てみましょう。

初版289句／463句＝20%、改訂版173句／206句＝14%、増訂版160句／133＝12% 次に句集『五〇〇句』の年代別季重なり句の比率。

昭和25句／21句＝12%、大正26句／161句＝16%、明治13句／128句＝10%

さて、このように虚子の季重なりは数字の上でも実証されていますが、東聖子という国文学者が、江戸時代の季重なりの研究をしています（「季重なりの文学性」H4）。彼女は芭蕉発句975句の中で同季の季重なりは約15%であるといっています。時期的には20%を越す時期もあつたと。この数字は虚子の発現率とも近いですね。

次に特徴の三つ目ですが、一句の中に矛盾した言葉を使う形がけっこう多いということです。矛盾構造の句とは次のような句の事を指します。これは私の分類基準の造語です。つまり一句の中に捻れ、矛盾を含む句です。次のような句です。

白牡丹といふといへども紅ほのか

冬の日のうち輝きて眉にあり

明日死ぬる命めでたし小豆粥

手鞠歌かなしきことをうつくしく

芍薬の花にふれたるかたさかな

白なのに紅、冬なのに輝き、死に対してめでたし、かなし

きにうつくしく等です。この辺を私は「矛盾」と定義しました。虚子がこのような句の作り方、あるいはものの見方を学んだのは蕪村からではないかと思われる発言が残されています。蕪村句集の「輪講摘録」です。そこで虚子は蕪村の句に対して次のように言っています。「蕪村の句 腰ぬけの妻うつくしき炬燵かな の句につき、醜なるものを捉えてきてこれを美化する大技量を見る。」（定本高浜虚子全集、別巻、虚子研究年表・54頁・松井利彦）。これは明治31年の発言です。

下記に年代別矛盾句数を示します。増訂版のみの数字です。昭和88句／667句＝13%、大正23句／220句＝10%、明治17句／332句＝7%

数字をみると、年代別の句数に占める割合は大差がなく平均的に出現していると言えます。この私から言わせれば特徴的な俳句の作り方が、年代別同じ様な出現率を示していることは、虚子の作句姿勢が一貫していたこと、ものの見方がほとんど変わらなかったことを示していると思います。俳句的なものの見方です。季重なりと同じく、季節の移りを素直に見る客観写生の至るべき結果とも言えます。初めに出した例句のように矛盾構造の句には歴史的に名句と言われるものが多いです。花鳥諷詠を作品として支えるものであります。自然に対して意識的に働きかけるといふ西洋的思考からかけ離れた態度が、こうした句を生むのでしょうか。虚子の言葉でいえば「あるようにある」「諸法実相」です。季節の移り、

自然の移りに対して構えない態度が花鳥諷詠の態度です。移るといふ現象には矛盾が含まれています。違う言葉でいえば変化が伴うのです。素直であるといふことはこの現象を客観的に把握するといふことです。確かに虚子は子規より写生を学び取りましたが、だからといって客観写生が先にあつての彼の俳句ではないのです。先に述べた態度、感じ方が客観写生を選び取らせたのです。矛盾句のデータが時代によつても違わない数字であることは明確にこのことを示しています。

また、お気づきの方がいるかもしれませんが、これらの句は一物仕立てです。二句一章ではありません。なぜでしょう。ここが最後に話す脳の癖に繋がるのですが、結論から言えば矛盾句は二句一章、二物衝撃の代替物なのです。AだけどBという構造はAとBをぶつけてCという新しい感情を生み出すといふ二句一章構造と殆ど効果的には同じです。白牡丹といふといへども紅ほのか この句は明らかにAなんだけどBといつて対立してCを表していますね。つまり二句一章と一物仕立て句は同じ構造なのです。

脳の癖と俳句の作り方、鑑賞について

虚子の歳時記の分析から、季重なりと矛盾構造の句について私の考えを述べてきましたが、このような特性は果たして虚子特有のものだったのだろうかという疑問が、今、私の脳裏を占有している問題です。ここからはこのことについて話

してみたいと思います。

先程の矛盾構造の話で二句一章と一物仕立ては同じだと言いましたが、これは人間の脳の癖でそのような形になっているかも知れないのです。こう考える背景には21世紀に入つてからの脳神経科学の驚異的な発展があります。実は脳との付き合いは皆さんご存じの『バカの壁』の養老孟司さんの本を1986年ぐらいに『ヒトの見方―形態学』の養老孟司さんの本の見方』などを読んでからの付き合いです。何故興味を持ったかといふと、子規、虚子という俳句の写生といふことはどういふことなのか、見えるといふことはどういふことなのかといふのが知りたかつたからです。でも養老先生にしても当時見えるといふことと脳が連携していることは書いていても（それだけでも大変な刺激でしたが）脳がどのようにして画像を作っているかなんて分かつてはいませんでした。その頃は脳神経の科学は言つてみれば科学と哲学の狭間にいたんです、それがコンピュータの驚異的發展でAI研究が進んだお陰で次々と新しいことが分かつてきたのです。それも我々にも分かる形で説明してくれる本が出るくらいまでに。池谷祐二『進化しすぎた脳』、茂木健一郎『クオリアと人工意識』には影響を受けました。外国ではボー・ロットの『脳は「もの」の見方』で進化する』などが参考になりました。

これらの本から私が得た結論は、脳は二つものものを結びつけようとする癖を持っているといふことでした。見るといふ

ことは目から情報が入ってくることです。しかし情報というのはその情報だけでは情報の価値が有りません。対比する情報がないと駄目なのです。例えば見張りが西の野原に兎がいたと報告してもリーダーは直ぐに動きません。東には野牛がいるとの情報があつて、リーダーははじめて意思決定出来ません。このところ大事なんです。目で見ただけでは何も生まれないのです。目から入った情報と何かが対比されないと人を動かす情報にならないのです。

詩の根本は比喩であると言葉があります。比喩は対比です。つまり二つの価値を分析してます。吉野弘という詩人は「言葉そのものが比喩を媒介として生成してきたのであり、言葉の生命は比喩そのものでもあると考えるほうが正しいと言えます。」(吉野弘『詩のすすめ―詩と言葉の通路』)、「比喩は詩の核だ。喩えこそ詩だ。」(今井 聖 増殖する俳句歳時記)といっていますから癖は本当なのだと思います。ではこのような癖を持つ脳の構造はどうなっているのでしょうか。皆さんは頭のいい人は記憶力がいい人だと思いませんか。頭のいい人は見たものを正確に覚えていると思つていて、実はい目の性能はほとんど皆さん同じですので、目から入った情報が脳の一部に蓄積されるまでのメカニズムは同じです。目に入った情報の何パーセントが有用活用されていると思えますか？ たった3%だけです。目から網膜に100%映った情報は視床というところで20%だけ採用されて、大

脳皮質にはまた濾過器があつてその15%しか伝わらないそうです。20%×15%＝3%ですね。どうですこれで野球が出来ますかね、ボールが来るのにその3%の情報しか来なかつたらバットに当たらないですよ。でも野球は行われている。何故でしょう。ここが問題なのです。実は残りの90%は脳が勝手に足りない情報を穴埋めしているんです。記憶から引き出して。ということはどうなりますか。ボールをよく見なさいといわれても、そしてよく見てもその見たものの3%しか使われてないんですよ。これで見ただことになるのでしょうか。ならないですね。少なくとも目では見ていない。そうですね、脳で見ているんですね。つまり記憶でみている。ということは3%の刺激情報に対して、それと結びつく情報が選択されて見えるという映像を作っているのです。脳神経科学者の池谷さんは机の情報が目から来たら、それも3%だけ来たらそれをなんとか机と判断できるように記憶の断片を集めてくるといっています。ここで興味深いことは、蓄積された記憶が正確で無いことです。断片だからこそ結びつけられる。正確だと見えている机がこの机ではないと判断してしまつて混乱してしまいます。昨日の僕と今日の僕は着ているものが違うのに網野さんは僕を間違えなく迎えてくれました。何故でしょう。記憶が正確であれば違う人と判断するでしょう。記憶が実に曖昧だから、同じと判断しているのです。皆さんは目の前の向日葵の花を描けと言われれば、だいたい正面から書き

ますが、そのときふと真横から見たり俯瞰の位置から見た向日葵を想像していませんか、それって何故出来るのでしょうか、情報は真正面のものしかないのに。そうですね記憶が穴埋めしてその映像を作っているのですね。脳の仕組みはそうなっているらしいのです。ものが見えるということはこういうことらしいです。

また、これに関してユクスキユルという生物学者は「環世界」という事を唱えていて、動物は自分が生きてゆくために必要な事しか見ない、感じないといっています。揚羽蝶は柑橘系の辺りしか通りません。餌と繁殖のためです。ノミは二酸化炭素を嗅ぎ取れば直ぐに近づきます。人間でも同じですね。俳人で無い人は、普通に生活している中で蟬の殻なんか滅多に見つけませんし、桜、梅以外の花には興味を持ちません。つまり知らない花は見えていないのです。ある職業の人にはそれに関連した情報はすぐ見えます。食堂をやっている人なら街の看板の中から直ぐライバルや、興味のある店を見つめます。これは生きるために見えている世界なのです。夫婦でも俳人の奥さんとそうでない旦那さんの見えている世界は違っているはずなのです。話が合わないわけです。つまり、皆さんは意識してみていると思っただけでしょうが、本当は脳の記憶が見せているのです。人間は記憶に操られているともいえるらしいのです。

ではこのことを俳人はどう考えればいいでしょうか？写生

しろと言われても実際は記憶が見ているんですよ。どうします？こうなると写生派も前衛派もヘッタクレモ無いですね。こんなことで、モノをよく見て写生しなさいという教育は成り立つのでしょうか？立たないですね。脳が勝手に動いているからです。勝手に動いて目の前の状況を判断するように脳内の記憶と連絡を取っているわけですから。しかしここで早とちりしてはいけません。写生は駄目だといっているのはありません。実は反対なのです。脳の勝手な動きを抑制するのが写生なのです。それを説明します。

先程3%の情報で後は記憶で埋めた画像を人は見ていると言いましたが、この能力は生きるためには必用です。そうで無ければ毎日違う世界が目の前に現れて生活が成り立ちません。だから生きていけるのですが、俳人としては生きていけません。何故ならそれは常識の世界から抜け出ていないからです。蝶が飛べば「舞う」、峡深くとくれば「秘湯」、風とくれば「遊ぶ」、露けしとくれば「愁」などという言葉の組み合わせに飛びつきます。無意識に。やりがちですよ。初心者の方は記憶の中の見つけやすい言葉を探して来るのです。これは脳の癖だから仕方ありません。しかし俳人としてはこれが怖いのです。訓練されてないと、普通の人と同じ言葉を探すのです。自分の眼前の風景を自分の普通の世界にしたがるのです。これでは良い句は出来ません。これが脳の癖なのです。さてどうしたら良いでしょうか？

一つは写生です。ありのままが脳を裏切るからです。虚子の季重なり肯定の考えはここにつながります。

季重なりと脳の癖

虚子の季重なりの肯定と脳の癖はどのように関係するでしょうか。脳の癖は、日常生活を安定させるために、眼前に起きた情報を自分が安全に過ごせるための記憶と結びつけようとしています。常に生きるのに必要な比較の対象を探し出しています。その脳の癖から離れた世界が、創造の世界です。つまり俳句を作るのも創作ですから、脳が勝手に日常生活の判断をしないようにさせなければいけません。虚子はこの脳の癖を体験的に知っていたと思います。そして虚子が考えたのは、その常識の癖から抜け出すには写生しかないと考えたのです。人は常に自分に都合の良いように世界（環世界）を作り上げます。しかし本当の眼前の世界は違うのです。だって時間が刻々と過ぎていくのですから。ですから脳を裏切るために、虚子は客観写生を唱えたのです、あるがままにを表現するのが一番アナーキーな創作活動だと思っただのです。

矛盾構造と脳の癖

もう一つの方法は、矛盾構造を意識することです。実は季重なり肯定と矛盾構造と客観写生は同じ事を言っているのです。すべて脳に反抗しているのです。矛盾とは自然世界の実

相のことです。世界はアナログに遷移していきまますから、変化が生まれます。一つの個体にも時々刻々と変化が現れてきます。それが自然の実相です。つまり矛盾構造の句は写生が必然的に作り出すものです。

前衛派のやっていること

写生以外で常識の世界から脱しようとしたのが、前衛派です。これは大変です。自分で自分の脳に蓄積された言葉を探しに行かなければなりません。通常の関係では済みません。なんとか自分が驚く関係を発見しなければなりませんから疲れます。このことに気づいた前衛派が金子兜太です。彼の「造型俳句論」は、見ているモノと自分の間に創る自分を置くくといっています。モノと直接取引はしないとされています。この創る自分というのが、脳の記憶を探す行為であることは間違いないところでしょう。通常は白いワイシャツから烏賊にはなかなか結びつきませんね。金子兜太はそれを見つけたのが創る自分だといっただのです。

結局これも脳の癖から逃れるためと考えれば同じ事なのです。脳から見せられている生きるための映像から逃れるためには、写生派も前衛派も同じ事をしていっているのです。

見えるという仕組みから俳句を考えると、対立的に考えられている写生派も前衛派も同じという結論になりました。さしてみなさんはどちらの態度をとりますか。

俳誌望見 梅澤佐江

「対岸」 令和四年一〇月号 通巻四三四号

主宰 今瀬剛一 発行所 茨城県城里町

昭和六一年九月、今瀬剛一が茨城で創刊。師系能村登四郎。「自分の感動を自分の言葉で表現する詩的な作風をめざす」を理念とする。(月刊)

主宰吟「マヌカン」一五句より

マヌカン人形汗べたべたと運ばるる
鯉の如くに緑蔭へ沈みゆく
撫子やたまたま同じ世を生きて
涼しいと言ひて笑ひし遺影なり
瀧飛沫貫いて瀧落ちにけり

一句目、真夏の街角を汗みどろの男がマネキン人形を運んで来る。冷たく無機質な物と生命力に溢れた生身の人間との取合せの妙。宛もマネキン人形迄汗をかいている様な錯覚に。二句目、汗みどろの男と擦れ違つた後、汗ばんで来て堪らず涼し気に池に沈む鯉の様に緑蔭に憩う作者。「沈みゆく」の措辞が実感を伴う。三句目、撫子の季語に女性を想起させる。たまたま同じ時代を生きた方であつたと。四句目、遺影の彼女はきつと涼やかな笑顔の方であらう。五句目、「貫いて」が眼目、生き方の潔さが瀧に投影されていて、初志を貫いて来られた作者を彷彿とさせる。

晴天集 同人作品 四〇名 各五句より

駆けめぐる夏野いづれは枯るるなり 成井 侃
午後からの空気重たし蟻の列 今瀬 一博

夜濯やかつては星のよく見えし 小松道子
水面すれすれ螢火の折り返す 岡崎桂子
水を撒くホースを伸びるだけ伸ばし 岸 三恵
高音集 同人作品 一三二名 各五句より

さちさちの壁にぶつかり跳ね返る 安嶋都峯
墓地となる真四角であり草いきれ 伊藤美津子
忌を修すぼつんと高く夏の月 井上和江
小気味よく進む織切り蟬時雨 大江貴久
高原の風にさらはれ夏帽子 中原修子
対岸集 主宰選 七八名 各六句より

雲の湧く丘に転がる麦稈ロール 梶村美佐子
西瓜切る六等分の目分量 白鳥兼子
夕立や舗道は白く匂ひ立ち 勝山久美子
波音は遠し岬の夏薊 額賀ゆき子
風雨去る毬栗青く転がして 藤田 彰
『対岸』創刊三十六周年記念コンクール作品入選発表は応募総数一五五編より「俳句の部」最優秀賞 一編、優秀賞 五編、奨励賞 二編、「評論の部」佳作 二編と力作揃いに圧倒される。同人六名による「今瀬剛一句集管見」、全員による「今瀬剛一作品四百句鑑賞」は皆様の直感と感性を楽しませて頂いた。充実した紙面の中、主宰による、記念企画特別評論『ぎりぎりの自己表現』、連載『能村登四郎ノート(二五十一)』は、句作の姿勢を学ばせて頂きました。
創刊三十六周年おめでとうございます。益々のご発展を祈念申し上げます。

現代俳句鑑賞

網野月を

初しぐれ糸をひかない甘納豆

川辺幸一

(2022年現代俳句カレンダー11月より)

一読滑稽句の様でもあり、哲学的命題を秘めているようでもある。そのオルターネイティブな性格は、作者が読者を試しているようでもある。読者の心の鏡となるように構想されているのである。真実のところは、もう作者に尋ねることは出来ないのだが。

引き算のごとく夕涼おとずれる

麻生 明

(『俳句四季』11月号・人新世より)

昨今の「夕涼」の引き算は、何とゆっくりとしていて、訪れる速度の遅いことか。「……ごとき」を用いた直喩の表現であるが、楽譜の速度記号のようにこの直喩が的確である。他に「レモンの黄自分以外になれない黄」がある。

地図見るに日傘差しかけ爆心地

石地まゆみ

(『俳句四季』11月号・諏訪のくにより)

ヒロシマ・長崎の数多の原爆俳句の中で、上五中七の「地図見るに日傘差しかけ」と表現した句は無いだろう。ヒロシ

マ・長崎、爆心地のイメージから惹起される八月は日本人にとってある種の根源的な要素を有している。季語「日傘」は現在という見せかけの平和日本を象徴しているように筆者には読めた。加えて「地図」は今現在の地図であって、嘗ての「爆心地」の地図を重ねることが出来るのであろうか。他に「真葛原忘れのし傷ひらきさう」がある。

昼の虫見えてゐるのか止みにけり

山本素竹

(『俳句』11月号・虫の声より)

中七の「見えてゐるのか」の主語は「虫の昼」と解した。どんなに作者が足音を忍ばせても、「昼の虫」に見咎められてしまった、ということであろう。ユーモアの行き届いた句なのである。

素懐なる秘仏小さしや供へ栗

平子公一

(『俳句』11月号・まつたりとより)

控えめな表現の中に濃くて深い句意を織り込んでいようである。中七の「秘仏小さしや」は作者には想定内のことではなかったであろうか。それでも実際に拝んでみると、その感慨を深くしたということなのであろう。中七の「……や」切れ字が表現の要となつている。他に「まつたりと齡透きゆく

水の秋」がある。

おほいなる影のよぎれり断腸花

秦 夕美

〔俳句界〕 11月号・新作巻頭3句より

座五の季語「断腸花」は強い表現である。字面は兎も角、花そのものは可愛らしい花である。江戸後期には「爛腸草（らんちやうさう）」の記名も確認できるので、発音からの当て字なのではあるまいか。それだとしても思い切った当て字である。宮川松堅先生曰く、花は、「真の美人の粧を倦む」とし、性、陰を喜ぶ、とある。上五の「おほいなる」は「影」の意味深さを表現しているのだろう。

この田にはピカソの絵あり鳥威

植田しづ子

〔俳句界〕 11月号・ピカソの絵より

中七の「ピカソの絵」がどのような態で「この田」に存在しているのかは分からない。将に「この田」であるから一般論ではないだろう。実際に田んぼ絵が観光資源になっている地方もあれば、田の様が「ピカソの絵」画のように作者には見えたということにも解釈できる。また座五の「鳥威」は、視覚的（案山子など）なのか、聴覚的（鳴子など）なのかは明示されていない。筆者は聴覚的なものを連想した。読者に任されている部分の多い句意であるが、何とも魅力的で、景から絵画を読み解いた作者の心象が表現されているように考えられる。

ががんぼはとまつてはじめてががんぼ

栗林 浩

〔句集「SMALL ISSUE」45〕

句集には二九六句が収められている。第一印象は、固有名詞が巧みに組み込まれている句句の多さである。しかもその固有名詞は、筆者の有しているイメージと一致するところのものも多く、納得の句ばかりなのである。掲句は、「草木鳥獸虫魚」の章に見出すことが出来る。この章の枠組みには一種の遊びの精神を垣間見ることが出来るのだが、それだけに哲学的な命題を問いかけられているようにも感じるのである。句集の文庫本態は小さな書籍だが、内容は大きな論点である。他に「わたくしを捜す放送秋の暮」「数へ日の街に熊出て撃たれけり」がある。

虻の眼のきれいな緑休暇果つ

ふけとしこ

〔句集「眠たい羊」より〕

季語の「虻」は厄介者で、むしろ嫌われ者である。原因はその刺咬による腫脹と疼痛の症状で、幼虫のころから刺咬は認められている。オロロとかタバチなどと呼ばれて、地方に拠っては様々な称があるようだ。その「虻の目」が美しいと作者は言うのだ。その特徴的な複眼は、生時においては緑色の虹様光沢を放っていて、確かに「きれいな」ものである。「休暇果」で、刺された箇所は癒えつつあるのだが、緑色の印象は残っている。ネガティブな存在の中にメリットを見出そうとする作者の心性が垣間見られる。作者の生来のものなのか、人生に獲得してきた知恵なのか。他に「春の水とはこどもの手待つてゐる」「雪の日を眠たい羊眠い山羊」がある。

山本鬼之介 選

水明集

稲掛けて我が故郷の景となる
忍城の歴史を今に水の秋
共白髪温め酒の酔早し
小流れに映る青空秋の園
花野ゆく姉の面影抱きつつ

熊谷越田栄子

木曾晴れて祭の如き吊柿
朝寒や両手で挟む椀の底
稲の穂や西日にいよよ黄金色
寝転んで甘き嘘聴く星月夜
那須岳の晴れて穂を振る芒かな

さいたま 新 暦文

窓越に流るるタンゴ秋時雨
秋の野を駆けゆく児らの近未来
秋深みランプを点しミルクテイー
こども食堂たれが置きしか笑み石榴
紅葉且つ散るをスケッチ点描画

さいたま 梅澤輝翠

秋郊の声つぎつぎに遠ざかる
秋野澄み借景の山指呼の間
コスモス揺らし元コーラス部熱唱す
山並や藍のやはらぐ秋思かな
湯の街の輪郭くづす秋時雨

菅原真理

秋澄めり園児等の声空が呑む
発条のブリキの玩具蔵の秋
道草は刈田に入りて下校の子
秋深し空想癖の恋女
刈田風嬢捨といふ棚田あり

清水桂子

太陽の匂ひ集めて柿落とす
逆悪や破れジーンズ秋深む
稲穂ゆれ棚田千枚空広し
軍鶏や人には媚びず秋の果
恋歌の果てが軍歌に敬老日

篠崎紀子

長き夜の筈糸ゆるきオルゴール
清秋や新色並ぶ靴の店
葉脈の透けて顕や秋あはれ
すれ違ふ風に乗りたし刈田道
眠りに入るや刈田に雨の降る夕べ

越谷 阿部幸代

柚小屋の隅に出を待つ濁り酒
逆縁に堪へて供花の彼岸花
蒼穹や湿原すべて草紅葉
今年酒ボジョレ・ヌーボー羽田着
斑なる桜紅葉の点描画

さいたま 反町 修

亡命の母子の夕餉ななかまど
新しき素秋を運ぶ青き風
朝寒や杜氏の太き指白し
漱洗ふ媪の背に秋の蝶
朝寒や杉玉揺らす里の風

さいたま 池田珪子

はたはたや見つむる我に飛び来たる
黄葉の並木虫食ひだらけかな
ジオラマの列車目で追ふ暮の秋
ささやかな酒に酔ひたり新豆腐
お開きやみな首垂るる曼殊沙華

平塚 丸屋詠子

いわし雲三年焦がるる東尋坊
また少し千切れて我も鱗雲
秋ひがんだ行業の暮參かな
切り返す言葉代りの新走
仲見世の更けゆく空の椋鳥よ

川口 新井のり子

秋晴の銀座マロニエ通りかな
妻摘みし秋草瓶に纏まらず
菩提寺へ色なき風に招かるる
ワイシャツの折目正しく新松子
刈田来て落日天を染めにけり

さいたま 小林京子

秋気澄み黄金に染むる朝の街
一条の箱根古道や秋澄めり
黄昏るる刈田に響む寺の鐘
夕暮れの大樹をおそふ椋鳥の群
海はるかしばし見とるるうろこ雲

さいたま 山岸久美子

信濃路の名主の館柿たわわ
木守柿十代続く鄙の家
逆さ富士散りし紅葉に色どられ
野仏を埋めつくすほど稲穂波
朝の道稲の穂先の黄ばみつつ

霜多光代

ボン菓子^{ボン}の匂ひ広がる秋祭
秋場所や元横綱の名調子
実篤^{実篤}の南瓜傾く文化の日
狛犬^{狛犬}の丸き背中を秋時雨
長き夜や三年日記読み返す

さいたま 元田亮一

秋の野や今日は気球の競技会
終バスの明かり遠のく後の月
草むらに拾ふうれしさ鬼胡桃
秋時雨四手に雫の光りをり
紙飛行機にのりて飛びたや秋の野を

さいたま 西幅公子

脱藩の竜馬菊師に水貫ふ
時政とりにくに会ひしも菊人形
朝もぎの無花果星の匂ひかな
ぼつてりと熟るる無花果手になじむ
津軽はや桜紅葉となりにけり

上尾 横山君夫

姦しき女湯別けて夕芒
川面には恋が映りて秋の風
耳飾りきらり揺らいで後の月
象使ひマシユマロあげて後の月
空席の列車の窓に後の月

新井孝磨

上顎^{上顎}の欠けし狛犬秋の風
「田舎教師」の下駄履きの像草紅葉
新松子九尺二間の新所帯
秋の虹三ノ輪の寺の苦界の碑
鴻毛より軽き命よ草の花

さいたま 染谷風子^{ふうし}
(正信改め)

ひとはけの遺灰のごとき秋の雲
少子化の波は大波蕎麦の花
秋暑し千手観音密に立つ
長き夜やベンガラ格子黒光り
ここだけは時が止まりぬ鴟の贅

本橋稀香

順風も逆風も舞ふ風の盆
野仏に贈る稲穂の芳しや
かうべたれ美しき稲穂の朝ぼらけ
渋柿や待つ人も無きUターン
寄せつけぬ高みに赤き木守柿

渋谷きいち

両肩に警策を待つ爽気かな
川芒トランペットへ靡きをり
鴟も待つジップラインの発着地
吾亦紅謝罪の時は過ぎ去りて
秋風に揺るる淡路の花時計

伊予 向井章子

晩秋や湖面に落とす山の影
葉がくれに艶めく明かり万年青の実
行く秋やひとりバス待つ村外れ
膝正し僧の説法身に入むる
新米のむすびに寄する笑顔かな

さいたま 岡田宣子

曾祖母や色なき風は便りめく
旅の朝残る燕と別れけり
そぞろ寒靴を揃へて神社の茶
秋うらら中国人の高音调
売り物に首を伸ばさぬ鹿角か

さいたま 吉川拓真

秋風や木の葉一枚肩に乗る
秋の風揺るる湖面の儂さよ
草紅葉ひたすらにただひたすらに
幽玄の能の摺り足秋の夕
畦道の地藏仏や残る菊

千坂平通

飯田忠男

銀輪を抜けて先行く刈田風
墨堤の柳条そよと秋澄めり
線香の煙まつすぐ秋澄みぬ
秋澄むや空を突き刺す避雷針
お愛想が上手な八百屋葡萄買ふ

討入りの佳境水さす菊師かな
不条理の極みひと幕菊人形
ゆたかさは嶺々遠き刈田かな
大鳥の飛来いざなふ刈田風
みちのくの杜氏理想の今年酒

伊奈 菅原卓郎

終電の尾灯を見つめ天の川
天の川漁火遠く揺れにけり
銀環や我が来し方に想ひ馳せ
鈴虫と星の交信する夜かな
鈴虫の美声献ずる阿弥陀仏

後記朝香

後の月いま神杉のてつぺんに
古利根の風にのせられ木犀香
コスモスや話上手と聞き上手
杉山に濃き影なげて十三夜
書の友も介護施設へ秋さびし

杉戸 佐々木史女

藤村の「初恋」が好き林檎むく
帰燕きせして部屋に残りし絵本かな
おもむろに月に吹く笙構へけり
ペン持つ手打つ手に変へて走り蕎麦
風の谷白から紅へ花芒

古池恵里子

秋郊の遠き煙や登り窯

秋の野に鐘の余韻や夜の帳

饗応に畑の彩り後の月

廃校が宿に変身秋深し

秩父路や秋の七草点在す

秋の旅元祖本家の幟旗

秋郊や古利根川の夕間暮れ

手作りの味噌の香りや十三夜

宵闇に魅入るドラマや「点と線」

道祖神をしつとり濡らす秋時雨

秋風や焼き立てパンのキッチンカー

牛膝師に付け囃す遊戯会

寄合にどぶろく提げて来る奴も

亡き母のぬり絵を壁に秋の声

終バスを下りれば一人後の月

スパーを出で小走りに秋時雨

新涼や三日と続かぬウォーキング

白障子隠し事など何もなし

いさかひの後の沈黙夜寒し

唐揚げを売るキッチンカー秋の雲

さいたま 小川洋子

竹澤和子

加藤でん治

若狭 山崎郁子

さいたま 小駒さち子

野村美子

吉川 杉浦理恵

さいたま 斎藤みよ

廃線のトンネル飾る紫苑かな

行く秋の色様々に風の中

秋の果て噴煙のぼる浅間山

万年青の実茅葺き屋根によく似合ひ

裏庭に灯り点りし万年青の実

車窓から飛び込むごとき後の月

秋の野の紫色に魅了され

朝焼けの遠き連山刈田風

越後路や刈田飛ぶごと列車旅

前向きの思ひで過ごし障子貼る

亡き妹の化身のやうな萩を刈る

千切れゆく雲惜しみつつ晩秋

穴まどひ金沙流るる砂時計

残照を夢とせむかな穴まどひ

倒れ込む若き血潮や草紅葉

菊日和こんな近くに散策路

名札下げ大樹さはさは初紅葉

トランペットの花に秋空見せてやろ

お手玉を両手で繰るや長き夜

「つや姫」てふ里の艶めく今年米

二上りの小唄爪弾く秋時雨
行く秋やメトロノームの鈍き音

さいたま 綿貫ひさの

香を聞く遊びは苦手月今宵
模様替へ居間へデビュウの万年青の実
行く秋やグラスひとつの貴腐ワイン

棟上げの木の香漂ふ秋しくれ
駅ピアノ奏でる調べ秋思かな
長野駅胡桃だれつけ走り蕎麦
荒川の大秋野行く万歩計
かな女句碑拝せし日なり後の月

さいたま 森下美智枝

太鼓台をすべて新たに秋祭

和歌山 高橋満耶子

廃屋に生き生きとして草紅葉
スキップのリズムが乱れ草紅葉
抄らぬ夫と断捨離ほしづく夜
エンディングノート仕上ぐる秋の夜

先駆者の苦労話や曼珠沙華
秋うらら初めに戻る立ち話
秋麗や錦織りなす山の肌
先客の飛蝗残せし野菜摘む
ハローウィン仮装の天使声高に

山戸美子

晴天の供華のまなかに鶏頭花
煮えきらぬ彼には赤き鶏頭花
秋簾半分巻かれ土偶三つ
蔓辿る辿りて零余子ほつほつと
東海道の旅人となりとろろ汁

川崎 鈴木玲子

水澄むや更科そばの洗ひ桶
原つばの少年野球新松子
古民家に凭るる枝や新松子
万年青の実膏葉匂ふ町家かな
窓越しの母に対面万年青の実

秋谷風舎

茶屋おせん菊師の腕の見せどころ
爽涼の詩情訪ぬる軽井沢
無花果やアダムとイブの聖なる樹
鹿の声阿修羅の在す興福寺
台風圏ライン飛び交ひ安否問ふ

春日部 諏訪サヨ子

一枝を軍手の手折る金木犀
朝寒や香り失せたる黄金花
朝寒や両掌で包むマグカップ
秋立つやえいと蹴り上げ逆上がり
見あぐれば「もぎ時です」と次郎柿

鳴海順子

朝霧やテールランプの滲む列
家路への足取り軽き良夜かな
自転車で巡る明日香路秋びより
庭先の柿の直売明日香の里
枯れゆくや小野小町の菊人形

草加 外村 紀子

又三郎駈け抜け森の胡桃落つ
松籟の丘の母校の秋思かな
秋思ふと窓辺の画架に向かふ午後
秋雨の午後のオペラの四重唱
主亡き庭に高々酔芙蓉

宮 代 関谷多美子

数学のテスト満点秋うらら
家にも点る明かりや秋の暮
縁に座し飽かず眺むる庭の菊
菊一輪活けて茶室に友を待つ
菊日和いつもの道を大股に

さいたま 高原 和子

行く秋やジンタに惹かれ芝居小屋
行く秋や冒険譚を読了す
石室に皇女ひめみか偲ぶ秋の果て
銀杏の実取るべからずと祢宜の告
欠礼の葉書五度読む万年青の実

さいたま 横山 礼子

秋天のぼつかり生まれ並木道
柿すだれ分けて官舎の灯の明し
木の根道ゆつくり降り紅葉山
明烏さくらもみちにばかり来て
青林檎時に酔つばき娘の言葉

大 阪 遠藤 人美

鹿垣の崩れしままに獣道
鹿垣を巡るハイカー声高に
朝寒や号令高く自彊術
見渡せば秩父連山朝寒し
朝寒や歯茎をさゆつと塩で締む

森 和子

さくさくと梨食む子らの歯の白き
歳を経て滋味と思へしむかご飯
秋の空西の彼方に戦火あり
白粉花かつては子らの鼻化粧
狗尾草白き老犬に一礼

東 京 畑宮 栄子

遠山の頂白し鴉の声
立合ひの音を目にする秋巡業
長き夜ラジオ文庫を聴き始む
秋麗黄金の森の中に居り
待ち侘びし美男の秋刀魚見つめ合ふ

岡田 芳春

菊人形弁慶踏ん張る衣川
秋巡葉子らを軽々挙ぐ力士
新蕎麦や猪口一杯の酒旨し
肌寒や洗濯物の生乾き
北目指す夜行飛行機月掠め

春日部 仲田利子

秋桜真昼の風に揺れてをり
補聴器の音の聞えや蚯蚓鳴く
万年青の実笹かき分けて見つけたり
行く秋の山の天気の晴マーク
行く秋や展覧会の画集見る

さいたま 木村るみ子

初春の小江戸の鐘ののんびりと
凍土を掘りて温みの浮いて来る
初稽古ポニーテールの静謐に
世の中を憂しと思へど蕪かな
老の母鐘の音で知る女正月

所沢 関根千恵

淡淡と今世を生きて敬老日
もらひ風呂急ぐ夜道や虫しぐれ
虫の闇鳥獣戯画のゆがみけり
とりあへず横になりたや敬老日
天窓にまたたく星やちろむし

山下ユリ子

豆腐買ひ一品料理や温め酒
同窓の語りたけなは温め酒
温め酒夢は儂し宝くじ
デジカメや構図は如何に秋の園
秋園や二人を包む夕間暮れ

さいたま 緒方みき子

出囃子のこち良き音や秋裕
ビル街に蕎麦を待つ間の月見酒
蓑虫や風の意のままケセラセラ
秋の蚊や一燈暗き外廁
妖怪の宴華やぐ狐花

森美枝子

ページ繰る手も嬉しげな夜長かな
一本道百舌鳥と我との声比べ
天の海百舌鳥の高音に雲いづこ
まどろみて色とりどりの夜長かな
長き夜を夢幻にひたり茜さす

鈴木香音子

公園に母の呼ぶ声釣瓶落し
藤袴に群がる蝶のフラダンス
会へもせず天に召されし白桔梗
天までも紅く染め上げ鶏頭花
栗おこは大盛りどんと仏前に

和歌山 嶋田洋子

水澄めば川底濁すどちやうかな
そつと切るわが子の髪や新松子
手を掛けし父の自慢の新松子
苦瓜やおのれの限界突破せよ
水澄みし稚魚おひかけて川の中

さいたま 川島夕峰

言伝てはないしよの事よ色葉散る
秋思あり見沼田圃にひとりぼつち
打ち明けし後の悔みやそぞろ寒
指さしてうざぎ住むてふ月見かな
金箔を纏ひて月の出でしかな

さいたま 小山あつ子

流星群を一人待つ夜や秋深し
秋深むホットミルクに黒糖を
準急ののんびり旅や花野原
芋だけは勘弁してと笑ふ子よ
朝雲の鈍き光や秋深し

鈴木敦子

冬支度お地藏さんの赤帽子
来ぬ人を今か今かと時雨かな
大根の白さ太さを競り落とし
この町のこの焼鳥の美味きこと
境内の風ざわざわと神無月

福田育子

新米をうましと孫のおかはりす
限り無き青のひろがる天高し
秋深し風の匂ひと万歩計
お札書く僧の美文字や秋の空
行く秋や音無き雨の石舞台

染矢峯雄

有る丈の色いろいろに菊繪
白菊や夢に来る友皆鬼籍
喧騒を逃れし陰に咳一つ
咳き込んで一つ遅らす一輛車
野仏の供花に秋草取り合はす

東京 水落守伊

「ああこれが色なき風」と知る朝
秋日和メスティン飯の上手く炊け
桔梗にはガラシヤの影の垣間見え
枝動けず地に触れまいか柿たわわ
紫の「もつてのほか」も菊繪

奥山粉雪

空中の巢にカヤネズミ寝る秋日和
ローリエを干すに程よき秋日和
五百羅漢の笑顔振りまく秋日和
馬駆くる日高草原秋日和
家人寝てゲーム三昧夜学生

さいたま 北出久美子

立ち活けの見事万年青の実の赤よ
水盤に落つる実の赤万年青の実
街路樹の木の実を探す母子かな
行く秋の風になびくやグレイヘア
行く秋の風心地良し頬を撫で

さいたま 樋口元美

水澄むや水面に遊ぶ雲の影
金木犀香りのシャワー浴ぶる朝
二歩三步よちよち歩く秋日和
ふる里の人の温もり黒葡萄
天空の透けたわわなる梨畑

さいたま 石浜悦子

羽やすめる蜻蛉の腹に深き赤

石関六弦

花道の六法の足秋深し

湯浅 和

しばらくは蜻蛉と夕日だけの道

ひとまはりふたまはりして背に蜻蛉

さざなみを所々に秋の川

見渡せばほとんどは空秋の丘

絵手紙をはみだす筆や秋惜しむ
天高し人の少なき絵画展
草紅葉二人の朝の散歩道
捨案山子に「おつかれ様」と言ひつつ行く

境内の道灌太鼓秋祭

糸井しるく

和歌山 南條さわゑ

冬の朝新聞開き目覚めたり

新築を祝ひて贈る万年青の実

玄関に灯のごとく万年青の実

行く秋のとりのどりの花更に濃し

卒寿迄歩くと決めて草紅葉
紅葉をめつつ楽しむ茶会かな
柿たわわしつかり耐へて古木なり
秋の川鷺飛び石を探しけり
秋の川流るる古木何想ふ

再会は天の配剤秋の園

東京 飯室夏江

柿送りラインに娘より笑顔

鬼石 榊原聰子

ゴンドラにゆるり運ばれ秋の園

街灯に色際立ちて秋の園

「二刀流」は期待以上や温め酒

最後まで好物残し温め酒

耳遠き夫との長夜会話中
虫時雨迎へ待つ子も庭に出て
秋の雨蒔きどき遅れの畑恵む

木道の浮き立つ尾瀬や草紅葉
あさばらけ滴を宿す草紅葉
鴨来る池辺に伸ばす紅き足
脚立より鉢を伸ばす冬仕度
味の濃き牛鍋夫は美味と言ふ

さいたま 鈴木藻好

足繫く母の施設へ秋の味
縁石の続く隙間の草紅葉
草紅葉先の稜線は茜色
七五三足利織の御召物
啜る毎目に焼き付きし蕎麦の花

武田重子

漫ろ行く哲学の道秋日和
石仏の貌柔らかき秋の晴れ
小鳥来る赤い実青い実艶めけり
陽だまりにしばし賑はひ小鳥来る
古き家のビルに変はりし小鳥来る
裏庭の種無し柿も風にゆれ
土割つて水仙の芽の現はるる
色づいてころりと落つるなつめの実
新米の甘き香りや今朝の膳
稻雀誰を待つのか首かしげ

鬼石 加藤ナヲ子

東京 山中いちい

満天の星なき空の名月や
名も知らぬ秋草亡妻へ供へたり
幼女の指に止まつてくる赤とんぼ
餌付けせむと新米まくも雀来ず
秋空や生くる力の一助なり

さいたま 川村 治

曼珠沙華剪る人のをり線路際
老い方にマニユアルは無し秋思の掌
「忘れてた」パジャマで拝む十三夜
ポンコツの吾をはげます蟬時雨
金木犀誕生祝と地を染むる

藤沢 小島喜代子

〔令和四年十二月号分〕

芋風畑のすべてを薙ぎ倒し
黄金の田んぼ揺らすや芋嵐
芋嵐納屋の土壁ほつれをり
終戦忌式典に出る高齢者
秋叙勲式典隅に儀典長

さいたま 千坂平通

〔令和四年十二月号分〕

カラコロと思ひ出バリの竹風鈴
彼岸花首を痛めて知る頭の重さ
亡妹が顔覗き込む秋の夢
三回忌済ませた後の月見酒
秋暑し洗濯物も動かずに

藤沢 小島喜代子

夕暮れてなぜ頬染むる酔芙蓉
行きずりの運動会に足止めて
古甕に莊嚴華麗菊づくし
菊花展よそ見する菊なかりけり

東京 柳父はる

明日までと賞味期限の鵲の贅
長き夜や妻の相槌「もう」と「未だ」
長き夜や急ぎし日々の懺悔あり
長き夜や過ぎ去りし日々ただ嗤ふ

草加 持永喜夫

散歩道零余子のサブリでもう一步
花揺らす風の一役秋深し
大空へ続く金の穂秋深し
急ピッチ作句に励む秋の夜

さいたま 小田美智

朝寒に散歩の犬の白き息
宙を飛ぶ子等の歓声鹿垣に
朝寒や至福のコーヒーほろにがし
また今年荒れし畑に鹿垣を

さいたま 落合和枝

夜長にはニーチェの言葉沁み入りて
機を送る展望デッキ鴨日和
ほの甘き「梅ヶ枝餅」や秋時雨
「海はなぜ青い」と問ふ子雁渡る

橋爪さなえ

天高し機影光りて雲に入る
木漏れ日に浮かび背伸びの榎茸
留守電の声繰り返す秋の暮

寺町知子

河風や家路を飾る虫の声
畦道や金波貫く曼珠沙華
幸村ののぼり閃く夕紅葉
雀にも着せてやりたし色落葉

大阪 飯塚智恵子

白菊や手向けて思ふ母のこと
晩秋や俳句を学ぶ楽しさよ
秋高やはづむ心のペンダント

橋本忠夫

祖霊座す古城の園に舞ふ紅葉
父の齢を倍は越ゆるぞ神無月
此の秋を笑顔で迎ふる六地藏
古刹に集ひ戦国武士の談話聴く

藤沢 藤田 寛

☆

☆

作品評

山本鬼之介

生々しい情景を眼裏に描き、一方で、綺麗に整備された現在の忍城との相違を、永い年月の歴史を通して感じ取っている。変わらぬものは、平坦な土地と、利根の流れである。

朝寒や両手で挟む椀の底 新 暦文

忍城の歴史を今に水の秋 越田栄子

忍城は、埼玉県行田市に在り、戦国時代の一四七八（文明十）年頃にこの地の豪族であった成田正等・顕泰父子によって築城されたとのこと。その後一五九〇（天正一八）年、豊臣秀吉の関東平定により石田三成が総大将となつて忍城攻めが行われた。付近を流れる利根川を利用しての水攻めが計画され、総延長28kmに及ぶ「石田堤」を築いて実行されたが、籠城側が種々策を講じて必死に戦い落城を免れた。その後、城は改修され数百年に亘つて城主が代り幕末まで遺つた。

この忍城を舞台にした映画「のぼうの城」が二〇一二（平成二十四）年に公開され、狂言師の野村萬斎が主役の剽軽な殿様役を名演したことでこの地味な城が一躍有名になった。

作者は、所属句会の吟行で以前この城を見学したことがあり、その想い出に惹かれて再度訪れたのである。その一部が今も現存している「石田堤」を含めて、水攻めされた往時の

草木が色づく晩秋になると朝晩は気温が下がり、特に朝は頬や手足に寒さを感じるようになる。朝餉の熱い味噌汁の入った木の椀を両の掌で挟み持ち、次に椀の底に指を掛けて椀を口に運ぶ。改めて説明するまでもないことであるが、この一連の動作によつて、味噌汁の温かみが手足から身体の中へじんわりと伝わってゆく。昨日までは感じなかつた朝の寒さを、味噌汁椀を通して敏感に体感しているのである。「椀の底」の一点に焦点を絞つたことで季語が活かされた。

紅葉且つ散るをスケッチ点描画 梅澤輝翠

「紅葉且つ散る」という季語の解説は、歳時記によつて多少違っているが、筆者としては、「木々の紅葉には遅速があり、紅葉している木と一方で散っている木がある。」という説明が分かり易くて良いと思う。この解釈に沿つて掲句を読み解くと、紅葉進行中の木の近くに早くも紅葉した葉が散っている木があり、その光景を観た作者の心が画家に変身してその両方を一枚の画紙に描いている。作者の更なる狙いは、それ

を普通の画法ではなく点描画に仕上げることである。

作者が観ている二本の紅葉の木の幹や枝、葉の一枚一枚を線ではなく点によって克明に描いてみたいという欲求が、この俳句を書かせたのだと思う。

湯の街の輪郭くづす秋時雨

菅原真理

この句から山に囲まれた温泉街を想像する。紅葉をしつとり濡らしてゆく秋時雨の中を、宿傘を差した二人連れの客が歩いてゆく。源泉が流れ込む川から立ち上る湯気と細かな雨が一つになって、山間にある閑かな湯の街の景色をつくり出している。中七の「輪郭くづす」の一言が、雨に煙った街景色を過不足なく表現している。

古い話で恐縮するが、戦後間もない頃に近江俊郎が歌ってヒットした歌謡曲「湯の町エレジー」が聞こえてくるような気分になった。

発条のブリキの玩具蔵の秋

清水桂子

永年放置されていた蔵を整理していたら、懐かしい品々が沢山出てきた。その中の一つがブリキ製の玩具で、乗用車・バス・電車・汽車などの乗物や動物類などで、どれもがゼンマイ仕掛であった。現代では当り前のプラスチックが日本に導入される前の時代に用いられていたセルロイドやブリキ製

の玩具で、動力も電池ではなく手巻きの発条ゼンマイであった。幼少の頃を懐かしみ、試しに発条を巻いて床に置くと、ブリキの象が長い鼻を揺らしてゆつたりと歩き出した。

「蔵の秋」という季語の斡旋が秀逸で、蔵のある屋敷とそこに住む人の生き様をも包含した秋のひと日を表している。

逆悪や破れジーンズ秋深む

篠崎紀子

ひと頃流行った破れジーンズのアッシーオンを、近頃時々見掛ける機会がある。電車に座って前の座席に目をやると、ジーンズの膝が二三本の横糸しかないような姿の人に出会うことがある。着古していてそういう状態になったのならまだしも、その様に加工した物をわざわざ買って履いていると聞いて唖然としている老人たちの中の一人が吾である。

作者も同様に、他人がどうのこうの言うことではないと承知しているものの、相当頭にきているのであろう。「逆悪」がそのもやもやした思いを実証している。

すれ違ふ風に乗りたし刈田道

阿部幸代

そよ吹く風の刈田道の散歩は実に快いものであろう。四方八方方を定めることのない風に、自由さの根源を見出した作者が、今日一日風に乗って遊べたらどんなに楽しいことかと空想しつつ刈田道を歩いている。

朝寒や杉玉揺らす里の風 池田珪子

杉玉は、造酒屋が杉の葉を束ねて球状にし、店の軒先に吊して酒蔵の看板にしているものである。別名を酒林・杉林・さかばた・さかぼうき、とも呼称する。秋に仕込んだ新酒が出来上がった時に、それを報せるべくみどり鮮やかな新しい杉玉に替えるのが慣わしと聞いている。掲句の杉玉は、茶褐色に変色した古い物であろうか、それとも、みどり色の新しい物か。この地で何代も続いている地酒の酒蔵を思うと、季語と合わせてみて前者の方が味わいがあると思う。

切り返す言葉代りの新走 新井のり子

酒を酌み交わしながら相手に言われた一言にかちんときたが、返す言葉を探すのがもどかしく、咄嗟に新走の酒瓶を相手の眼前に突き付けたと、筆者ならではの解釈を試してみたが如何であろうか。

一条の箱根古道や秋澄めり 山岸久美子

昔の旅人にとって、東海道の難所の一つであった箱根古道である。筆者も徒歩と自転車二度体験したが、結構きつかった。車が通らず人が少なく、昔の旅人の気分になれる秋晴の箱根古道を一条と表現したところに妙味を感じた。

蒼穹や湿原すべて草紅葉 反町 修

草紅葉に彩られる湿原で人気の高い所は、尾瀬ヶ原、大雪山・奥日光小田代ヶ原・八甲田山・月山などであるようだが、何と言っても筆頭は尾瀬ヶ原であろう。蒼穹の下、見渡す限り色づいた草紅葉を眺めながらの木道行は最高!!

ジオラマの列車目で追ふ暮の秋 丸屋詠子

「ジオラマ」の意味は辞書で理解したが、現実感が得られず、作者に訊いてみた。作者の説明によると、小田急線海老名駅西口至近に「小田急ロマンスカーミュージアム」という施設があり、その中の「ジオラマパーク」で、新宿から箱根湯本までの小田急沿線のジオラマの街並にロマンスカーや通勤電車を走らせ、映像・音響・照明でダイナミックに演出している。とのことであった。作者は、熱心に視ている内にジオラマの世界と現実とが一つになり、興奮した心の証を俳句にしたのだと思う。因みに、作品評の三行目と四行目の傍点の文字でインターネット検索すると動画が視聴出来る。

秋晴の銀座マロニエ通りかな 小林京子

見ての通り、掲出句はまことにあっさりした内容であるが、その真裏に作者の並々ならぬ思いが籠められているのだと思いい取り上げた。マロニエ通りは、JR有楽町駅から外堀通りを

渡り、銀座二丁目と三丁目の間の通りで、通り名の由来は、パリに縁の深いマロニエ（セイヨウトチノキ）が街路樹になつてゐるから。通りの両側には、ヨーロッパの街を思わせるような瀟洒な建物が並び、カルチェ・バーバリー・シヤネル・ミキモトなどの高級店や食通を誘うグルメ店がある。作者が心身の浮き立つような秋晴の一日、マロニエ通りを心ゆくまで散策し、その雰囲気に魅了されたのだろう。「その魅力をいちいち説明出来ない。とにかくマロニエ通りなんだよ。」と叫んでいる俳句なのだと思つた。

逆さ富士散りし紅葉に色どられ 霜多光代

富士五湖の水面に映つた富士山に、散つたもみぢ葉が敷き詰めて天然の絵を描いている。こういう景色は、現実の富士山ではあり得ないことであるから、貴重な体験と言えよう。

狛犬の丸き背中を秋時雨 元田亮一

寺院の仁王像と同様に、何時も一対で神社の社頭や社殿の前に居て魔除けの役目を担っている。年数を経て風雨に曝され、耳や鼻が欠けた憐れな狛犬を見掛けることもある。年々から年中台石の上に座している狛犬を労るかのように、秋時雨が濡らしている。

脱藩の竜馬菊師に水貰ふ 横山君夫

混迷の幕末に偉業を為したにも拘わらず、若くして無念の死を遂げた土佐の脱藩浪士・坂本竜馬の菊人形。竜馬の人氣は現在もなお高く、菊人形と一緒に記念写真を撮る人が多い。そんな竜馬を労うかのように、菊師が時折水を差している。竜馬が東奔西走していた昔、海道の茶店で水を貰つたように。

上顎の欠けし狛犬秋の風 染谷風子

この狛犬はかなり時代を経たもので、置かれてゐる場所は町中の神社ではなく、地方の山里にある名も知れぬ小さな社ではなからうか。狛犬の石の台座も狛犬と同様に苔むしており、究極は上顎の欠けた狛犬である。これから後もその哀れな姿を晒し続けるのかと思つと胸が痛む。爽やかな秋の風が狛犬の無聊を慰めているのだろうか。

順風も逆風も舞ふ風の盆 渋谷きいち

富山県八尾町で毎年九月一日から三日間行われる盆の行事である。地元の住民に加えて、八尾町を離れた人達がこの行事のために帰郷して何時になく町が活況を示す。更に多くの観光客が観光バスや列車で押しかけてくるので、平素は人口が少なく閑かな町が人人人の熱気で溢れかえる。一度観たら虜になる越中おわら節の唄に乗って男女が鮮やかに踊る。胡弓が独特の情緒を演出し、夜通し唄い踊り続ける群衆に、山から吹き下ろす風と吹き上げる風が合体する。

水琴窟

(水明集十一月号鑑賞)

池田雅夫

傷ひとつ無き芋を買ふ終戦日

遠藤人美

戦時中の食糧不足を補う代用食として「さつまいも」があった。「終戦日」と「芋」というとどうしてもそこに結びつく。なお、「芋」は里芋のことで、さつまいもは「甘藷」といわれている。飽食の現代は規格に合うものだけが流通する。

病葉を掃く古びたる庭箒

山崎郁子

青々と葉を茂らせて生氣にあふれる夏の庭木。反面、樹下は日光が遮られほの暗さが暑さを柔らげている。庭木は暑さに堪えながら平然と茂っている。「古びたる庭箒」から、新陳代謝のように次々に葉を交代させる。人の生命と重なる。

講釈の包丁研ぎ屋蟬しぐれ

諏訪サヨ子

昔は「包丁研ぎ屋」や傘の直し屋などが回ってきて、門口で商売している姿を見かけたが現在は全くない。ステンレスや超合金の硬い材質で長切れするからだろう。長々と能書を並べ講釈している。「蟬しぐれ」が「立板に水」に思える。

弱小と言へど剣士や西瓜割

小林京子

「弱小と言へど剣士や」と緊張感をあおっておいて、最後に「西瓜割」で可愛らしくしめくくる技量を称える。読後に「なるほど」と納得してしまった。目隠しの児の姿が浮かぶ。

「内緒よ」と口もと隠す秋扇

湯浅 和

夏が過ぎてだんだん使われなくなってきた秋扇。それでもなんとなく手放せない。その秋扇の特性を充分に使っている。元来、人は内緒ごとが好きなのである。「口もと隠す」秋扇ではあるが、何の役にもたっていない。人の本性にせまる。

路線バス終点までの窓の虹

武田重子

「路線バス終点まで」は相応の時間を要する。偶然に現われた虹をバスの窓から眺めているうちに終点にたどりついてしまった。夕立の後などの虹は長く続かずすぐに消えてしまうことが多い。夕虹が立てば明日は晴れると言われている。

応援歌の響くグラウンド夏の空

高橋満耶子

今年の高校野球は観戦が可能になり、プラスチックによる応援が力強く行なわれた。また、平井大氏が歌った2022夏の高校野球応援ソング『夏の甲子園』が大ヒットした。炎天下で白球を追う高校球児の姿は人を魅了してやまない。

人を待つ手の置き所秋扇 岡田芳春

人を待つている時の時間は長く感じられるものだ。準備が整い、あとは現れるのを待つだけである。持て余した手を無意識に秋扇に伸ばした。人の心理を、手の細やかな動きで描写し、季語の「秋扇」を強く印象つけている。

やはらかに握る手洩るる蛍の火 北出久美子

少年の手であろうか。捕まえた蛍をつぶさないように慎重に手で包み込んでいるのだ。その手のすき間から幽かに蛍の火が洩れ輝いている。蛍の火が全く熱くならないことを知ったはずだ。少年の貴重な体験を観察した句に共感する。

深更の在宅勤務虫の声 鈴木敦子

「深更(しんこう)」は深夜、夜更けのこと。コロナの時代になって「在宅勤務」が日常化してしまった。煩わしい通勤ラッシュに悩まされない。反面、就業時間が疎かになり夜遅くまで働くことも。そんな折、「虫の声」に癒される。

祖父偲びダリア庭より剪り供ふ 関谷多美子

亡き祖父が育てていたダリアであろう。今年もみごとに咲いた。そこで仏花にと剪ってきたのだ。祖父への強い思いを詰めすぎると逆効果になる。重複するものを省く心がけを。

風誘ひ火の神宿る鶏頭花 持永喜夫

「火の神宿る」が「鶏頭花」を修飾している。真つ赤な鶏頭花はまさに火の神にふさわしい。その発想を称えたい。百センチほどに伸びる鶏頭花。その真紅を詠んだ句はあるが、風を詠んだ句はほとんどない。そこに新たな発見がある。

菊月の空を広げて庭師去る 古池恵里子

陰曆九月は長月といわれ、長夜月をつめたものとされている。また、菊の盛りのころから「菊月」ともいわれる。「菊月の空を広げて」には庭師のさまざまな仕事ぶりがみえてくる。冬に備えて枝をはらい、手際よく終わらせて帰っていった。

舞ひ踊る緑のカーテン野分中 小田美智

一瞬、部屋のカートンかと思ったが、否、「野分中」であるので森や草原のことであろう。森や野山の木が野分によって大きく揺れて、まるでカーテンのように見えたのだ。はつきりと「乱れ舞ふ木木はカーテン野分かな」と断定したい。

鎌倉や関谷の野菜夏市場 藤田寛二

鎌倉野菜と言われるほど農産物が豊富な鎌倉。関谷地区は大船の北西で最も北に位置する。鎌倉野菜とは異なるかも知れないが、一般的には鎌倉野菜としたほうが理解しやすい。

網野月を選

山紫集

後の月解体さるる跨線橋

石川理恵

うす雲の流れて欠けし後の月

宇田白鷺

青年の青髭光り後の月

内田恵子

せせらぎに色を写して後の月

松本光子

以上特選

十三夜君の単車の尾灯消ゆ

横山礼子

洪水の跡消えぬ生家や後の月

高島寛治

数量限定プリン完売後の月

正木萬蝶

この道も一方通行十三夜

高橋満耶子

十三夜ほろほろ崩る黄身しくれ

下川光子

友追ひし急ぐ道のり後の月

武田重子

後妻にも後妻の子にも後の月

河野はるみ

妻もなく語る人なく後の月

田中章嘉

通し稽古の帰りの漏路十三夜

丸山マスマ

十三夜痴呆の母と椅子二つ

鳥羽和風

後の月コロツケパンに無いキャベツ

石田慶子

見送りて駅舎に一人十三夜

飛永 鼓

松並木の影黒と後の月	外村紀子	毎晩の酒も今宵は後の月	檜鼻ことは
テント出て眺む雲間の後の月	仲田利子	足裏に残る毬の触りや栗名月	福田千春
煌煌と輝き語る後の月	南條きわゑ	後の月一合で足る栗の飯	藤澤喜久
吾が影とゆく畦道や後の月	西幅公子	浄閑寺に眠る遊女や十三夜	保坂翔太
朗読の声の柔らかか後の月	野口和子	吾を呼びつ妻の見上ぐる十三夜	曲淵徹雄
木星の寄り添ふ雲に後の月	野田静香	庭下駄で煮物届けし十三夜	町野広子
偶に来て後の月見る鳩の海	野平美紗子	とりどりの果実並べて後の月	松井由紀子
天空の山城照らす後の月	野村美子	襟立てて句座の帰りや後の月	松宮保人
初老のふたりの背中後の月	畑宮栄子	二次会は飾らぬ友と後の月	宮崎紫水
後の月遥かに姫の牛車見ゆ	原田秀子	靡線なる最後の汽笛後の月	宮崎チアキ
秀吉は見たかうたかた後の月	樋口元美	後の月ゴンドラの唄口ずさむ	元田亮一
読経の声する方や後の月	日高道を	十三夜女将はんなり京言葉	本橋稀香

十三夜銀座を歩く靴の音	森 和子	山待つと友の伝言十三夜	阿部幸代
囁きも応へも独り後の月	森川義子	ピザ窯のごとき丸さよ後の月	新井孝磨
ライブの余韻浸りて仰ぐ十三夜	森下美智枝	相聞の調べに酔ひし十三夜	新井俱子
ひとときを車窓に添ひぬ十三夜	森 美枝子	後の月隠れて吾も影無くす	飯田忠男
音信の途絶へし友よ後の月	森本早苗	喇嘛僧の列過ぎ去るや十三夜	池田珪子
村芝居世話物に泣く後の月	山田美佐尾	連れ立ちて古都の参道十三夜	池田雅夫
しづしづと琵琶湖疏水の十三夜	山中いちい	パン生地を厨に寝かせ後の月	井上燈女
後の月薄き座布団縁側に	湯浅 和	寂しさのつる別れや十三夜	井上玲子
兄見舞ひともに見上ぐる後の月	横山君夫	訳有りの二人見守る後の月	井口俊晴
お百度の足音ひとつ十三夜	青木鶴城	あの辺り思ひ出させる後の月	上戸千津子
遠ざかる鈍き汽笛や後の月	秋谷風舎	盛り塩の戸の後ろ手に十三夜	梅澤輝翠
後の月つい切れたがる三の糸	新 曆文	シフォンケーキの焼くる香満つる十三夜	梅澤佐江

二人しておつり人生後の月	大塚茂子	義仲寺に馳せる思ひや後の月	斎藤みよ
墨の香の匂ふ写経や十三夜	大場順子	雲きれてゆるりと晴るる後の月	榊原聰子
降りそびれ終点で待つ十三夜	岡田宣子	薄雲のレースを纏ふ後の月	佐々木史女
友逝きてことさら淋し十三夜	奥山粉雪	ひたひたと寄する波音後の月	笹本啓子
負うた子と問はず語りや後の月	加藤でん治	胸中の火種は消えぬ後の月	篠崎紀子
肩よせてふたりで見上ぐ後の月	木村るみ子	電気ブラン吾妻橋から十三夜	渋谷さいち
ローカル線のホーム明るき後の月	熊倉千重子	コンサートの余韻に揺るる十三夜	菅原真理
後の月一葉の文味はひぬ	小駒さち子	十三夜君の在りしを確かむる	杉浦理恵
漆黒の北の地を行く後の月	越田栄子	後の月名残の茄子に花咲きぬ	鈴木藻好
出航の汽笛が響く後の月	後藤綾子	外つ国の「リリー・マルレーン」十三夜	鈴木玲子
「ただいま」の声待つ吾子よ後の月	小林京子	人力車背なの温もり十三夜	諏訪サヨ子
チャルメラやビルの谷間の残る月	近藤徹平	美術館友と出づれば後の月	関谷多美子

別れ話は明日にしよう後の月

瀬戸雄二郎

読み止しの一葉日記十三夜

染谷風子

逆縁や泉下にもあれ後の月

反町 修

山紫集作品評

網野月を

十三夜君の単車の尾灯消ゆ

横山礼子

中七「単車の尾灯」はテールランプのことで、オートバイの後身に配置されている標識灯である。彼女を自宅まで送り届けた後、走り去るオートバイの尾灯を眺めていたのか、右左折して、尾灯が見えなくなったのであろう。車ならハザードランプを付けて合図したりするのだが。「十三夜」には、センチメンタルリズムがよく合うようである。

数量限定プリン完売後の月

正木萬蝶

何故か「後の月」は食物との取り合せも似合うようである。それも甘い菓子かデザートの様なものに似合う。月の属性が

何となく優しさやファンタジックなものを連想させるからである。加えて「数量限定」や期間限定の文句は購買意欲をそそるようになっていようである。こうして購買意欲を掻き立てられた消費者は、「プリン完売」まで導いてしまうのである。上句の「数量限定」の大胆さに魅了される。

十三夜ほろほろ崩る黄身しぐれ

下川光子

座五の「黄身しぐれ」は和菓子的一种で、白餡に卵黄と砂糖を混ぜて練り上げ、微塵粉を加えて成形し蒸しあげたものである。黄色がかった色合はまさしく上五の季語「十三夜」の月色に匹敵するものがある。中七の「ほろほろ」のオノマトベも妙味を演出している。

後妻にも後妻の子にも後の月

河野はるみ

上五中七の「後妻にも後妻の子にも」の表現している記憶に留まる事事の標準化が句意の肝である。句意は意表をついてる。今どき「後妻」という措辞は、ジェンターの観点からは問題を有するかも知れないが、作者が女性だけにその際どさを躲しているようだ。

通し稽古の帰りの漏路十三夜

丸山マスマ

中七の「帰りの漏路（くけじ・くけみち）」から「十三夜」を望むことが出来た、と解釈した。狭隘までではないが車道ほどの幅の無いくけみちであろうか。ということはこの「十三夜」の月は頭の上まで昇っているであろうから、かなり遅

くまで「通し稽古」が続けられていたのに違いなだろうか。

後の月 コロケパンに無いキャベツ 石田慶子

和製の調理パンにはほんの少しだけ野菜が入れられているものだ。ハムカツパン、フィレカツパンなどが代表だが、焼きそばパンには入れられないようだ。さて作者の食したコロケパンにはキャベツが無かった。少しでも野菜が挟んであると喉の通りが良いのと思う作者の心の在り様が「後の月」に映しだされている。

後の月 解体さるる 跨線橋 石川理恵

駅の新改装などに伴って跨線橋が廃止されることがある。この跨線橋も既に通行止めになっていて、足場が組まれて解体を待つだけの様になっているように思う。至便さや安全性などが刷新される価値は大いに評価するが、使い古したものを解体する際の言い知れぬ淋しさは常に伴うものである。加えて解体される直前、最中の様はこの寂寥感を一層掻き立てるものである。季語との取り合わせが秀逸である。

うす雲の流れで欠けし後の月 宇田白鷺

「後の月」はもともと二日分足りないものであって、僅かに痩せているのであるが、更に薄雲によって月体に隠されたところがあるというのである。他方、薄雲が流れ去って月が現れてみると満月には不足している、つまり「欠け」ている月であった、という解釈も成立する。そうするとこの薄雲が月

体を朔いて持ち去ったようにも読める。後者の方が物語が生まれる解釈になるかも知れない。

青年の青髭 光り後の月 内田恵子

「後の月」の僅かな光源に「青年の」髭は青光りしているのである。この髭の青の象徴は、静寂、涼しさ、深さ、寂しさなどであって、青色の発色を期待しているものではない。多分にイメージを含んでいるだろう。この取り合わせは、上五中七の句意と座五の季語「後の月」が合致しているということではない。「後の月」下に「青年の青髭」を配することで、この「青年」の心の中を見通そうとしているのである。沈思する「青年」は、態とは真逆に激情をその心のうちに秘めているのである。何とも妖しい青光である。

せせらぎに色を写して後の月 松本光子

中七の「色を写して」が肝心なのである。もともと「せせらぎ」は小流れの浅瀬の音を意味する言葉であったが、後にその小流れ自体を表す言葉にもなった。万葉、古今の歌人は「せせらぎ」の実態を見るよりも音で認識していたであろうから当たり前のことである。俳諧の連歌になり、小流れ自体を実際に見て表現するのが当時の前衛になったのだ。そして掲句は「色を写して」と表現する。

座五の季語「後の月」はむしろ視覚的表現であるから、天と地に「後の月」と「せせらぎ」の対象があって広角的な作句となっている。

大村節代 選

鼓
笛
集

芝居見るおばばの膝の柿落葉
木守柿たつたひとつを崇めたる
化けますよ児らの頭上の柿落葉

梅澤輝翠

二所帯に玄関一つ花八手
箒目の清き参道冬初め
感染の隔離に届く太鼓焼

森美枝子

ほっこりと旅のひと時蕪蒸
大根三本引けば手強き地の力
小春日や地元力士の初優勝

阿部幸代

尼寺の尼僧のうなじ秋思濃し
身に入むや人生劇は人なみに
萩の花揺るる禪寺芭蕉の碑

佐々木史女

盛り上がる土竜の通路小六月
帯解の主役に色気ほんのりと
独り寝や時計の刻む冬の夜半

反町 修

冬空に大師会へそな奥の院
なほ青く忿怒の明王冬に入る
小春日や五色幕踊る長谷の寺

北山建治郎

色恋を醸す長屋の一葉忌
凧が盛塩崩す大黒屋
ピノキオの鼻の長さ鯨浮く

新井孝麿

御神籤を引いてるんるん小春風
浅草に活動写真見る師走
鍵掛けぬ留守の交番冬うらら

染谷風子

雪ばんば村の外れの辻仏
朝寒や味噌の匂ひの台所
露天風呂湯気に混じりし初時雨

湯浅 和

芒穂の大白波や空は藍
寒晴や列車待つ間の富士の山
幕が降り余韻体に年の暮

武田重子

夕映えの刈田広ごる越の路
友よりの白茄子届くレシピ付き
温め酒含みほぐるる父の顔

岡田宣子

捨て猫をやさしく抱いて文化の日
赤い芽のコンニャク並ぶ日暮時
口あけて重さうな実の石榴かな

加藤ナヲ子

バーチャルの城跡めぐり冬初め
寒波来る銀の食器を磨く今朝
銀盤の人しなやかに冬めきぬ

野村美子

お散歩カー帽子は揺れて秋日和
木の実独楽こども食堂並べをり
秋深し「よだかの星」を聞く夜よ

樋口元美

酸し甘し青き蜜柑や山ご飯
「蓑山」や冬日の沸かす雲の海
灰色の木枯し街を舐めにけり

秋谷風舎

新緑をまとひ少女の逆上り
人住まぬ村を案内捨案山子
休業の一軒宿や冬ざるる

山下ユリ子

彰義隊上野の森の散紅葉
冬めきて寒村さらに淋しけれ
冬めくや第九の歌が耳に入る

千坂平通

☆ ☆

さとからのお裾分けとや自然薯来
遠き山熊穴に入り丸くなる
沢庵を噛む音響く石路の花

山中いちい

鼓笛集作品評

大村節代

化けますよ児らの頭上の柿落葉

梅澤輝翠

上五の「化けますよ」の呼びかけが秀逸。人間に同じ人物
がないように、木の葉も同じ葉はない。

芝居を見ているおばばの膝の落葉は行儀が良いが、子供達
の追う落葉は、色々な形に化ける。今度は何に化けるのかな？

感染の隔離に届く太鼓焼

森美枝子

新型コロナは三年経ても、未だ終束しない。気をつけて生
活していたのに、何時の間にか、新型コロナに感染してしま
った。しかたなしに引き籠もっていた。そんな折、太鼓焼が
玄関前に届き感謝した。

因みに、大阪は「太鼓焼」、江戸神田今川橋付近では「今
川焼」、埼玉は「甘太郎焼」等々、各地で呼び名は違うが、
何れも冬の季語で、ほっこりと暖かい。

鼓笛集巻頭（十二月号）

私の好きな一句（自句自解）

加藤でん治

虫時雨そつと障子を引きしまま

厳しい残暑は過ぎたが、雨戸は開け放たれ網戸だけ
の里の家。

夜の帳が下り始めると、荒れた中庭の草叢から涼風
が立ち虫の音が。リンリンと鈴虫、チンチロリンの松虫、
カチャガチャの響虫、馬追いや鉦叩きなども。和室の
障子をそつと開け、豊かな自然の音楽堂に身を置いて
虫時雨にしばし聴きいる。

そんな至福なひとときの一句である。

小春日や地元力士の初優勝

阿部幸代

日本中が、いや世界中がサッカー一色。テレビも朝から晩
までサッカー。この句を拝見して、そうだ大相撲もやってい
たのだと思った。十一月場所は平幕の「阿炎」が初優勝かな
と思ったが定かでなく、スポーツとは言え、一斉に皆が同じ
方を見る怖さをふと思った。

句集喝采

近藤徹平

◆大越秀子「父の手の平」

老岐坂書房

著者略歴 昭和二十七年埼玉県加須市生。平成五年野火「やぐるま句会」入会。同二十四年野火「かぞ句会」を共同で立上げ、移籍。同二十七年現代俳句精鋭選集十五（東京四季出版）刊。

著者はあとがきに研究機関に勤務していた夫君徹夫氏と結婚し、教員をしていた夫君の両親と農地を耕作し三人の子育てに努め、子の独立を機会に俳句に入門したと記す。菅野孝夫野火主宰は跋文に、著者の作品に流れているのは天性の資質に加え一家を支えて更にも身についた優しさであると記す。

産み月の子と肩並べ茅の輪かな

自己主張おぼえて二歳アマリリス

時の日の母の形見の腕時計

やはらかき父の手の平蜜柑剥く

家族の句が多いが、著者は義父、義母も父、母と詠むとのこと。第一句、安産祈願は嫁に行った娘か、息子の嫁か。第二句、孫の成長を喜ぶ。第三句は義母の形見。第四句、生家の父は現在施設にいたが実家に帰った時は一族が集まる。

ダイヤモンドダスト湖畔の窓に日の差して

夏雲や低き家並みに竹富島

尖閣湾 断崖絶壁 夏怒濤

夫君が引退してからは夫婦で北の極寒の地から南端の国境付近まで俳句の旅を大いに楽しんでる。

◆大越徹夫「鮎の川」

老岐坂書房

著者略歴 昭和二十四年埼玉県加須市生。平成二十四年野火「かぞ句会」に入会。同二十六年野火同人。

著者はあとがきに、平成二十四年に再就職したのを機会に、秀子夫人の俳句の旅に運転と案内役を務めた。菅野孝夫野火主宰から加須市に野火句会の新設を乞われ、自らも新規会員として発足に漕ぎつけた。菅野主宰は跋に、著者は淡水魚増殖の専門家で現在も技術開発者の指導に当たる一方で、「かぞ句会」に高校の同級生を会員に勧誘して頂いたと記す。

鮎の稚魚放流終へて川談義

堰の下稚鮎の群に鷺の嘴

孵化場に水槽並べ鮭を待つ

妻と行く瀬田の唐橋月冴ゆる

窓越しの花火に嫁と姑と

第一句、第三句は本職の鮎・鮭に関する句。第二句は著者の自宅に近い利根大堰の景。第四句は秀子夫人と同伴の吟行句。第五句、母堂と夫人と共に花火を楽しむ景。

稲架濡れて鶴の飛び立つ出水郷

守宮棲むダム你真下の地下通路

みちのくの旅の夜寒や爛銅壺

第一句、魚の専門家が鳥を観察。第二句、関係者以外立入禁止区域の景。第三句、東北駐在経験のある筆者が好きな句。

『鳴』二〇二二年一月号

今月の二冊

奥井あき

句集『マネキン』

山本鬼之介

昭和四十六年から令和三年までの八章からなる渾身の第一句集。

「目白」と「冬霞」のイメージから幻想的なシーンが浮かぶが、「運ぶ」で現実に着地する。地名は「目白」でなければならぬ。絶妙なこの句が句集名の由来となった。

夏空や男の襟は尖りをり
まつ白なシャツの男がすくつと立っている。「襟の尖り」が直裁的で鮮やかな切り口を見せてくれる。「襟の尖り」

降り積もった雪がやがて雪崩を起こすかもしれない、それとも、事件のあった後なのか、不穏な予感がする。雪の止むのを願っている。

夏の灯の昏きに木偶の女泣く
子午線の街を巡るや鱧提げて
納戸の奥の行李に運春うつくまる
この三句の手練のなんとも言えない心地良さに魅了された。安堵感のあるどっしりとした句柄。

散見する諧味のある句にくすつとしながら、たとえば、
山眠り伸ばしてみたる乳房かな
女三人ちやぶだいで返しなき花見
捉えた対象を深く見て眼前に差し出してくる一方で、吉祥天から宝塚、赤軍派と、広いフィールドを自在に遊ぶ軽やかさも流れる一冊である。

昭和十三年東京都生まれ。昭和四十六年「水明俳句会」に入会。平成三十年「水明俳句会」第五代主宰を継承。
(文學の森刊)

特集 第37回俳壇賞決定発表

巻頭作品10句

石井いさお・菅野孝夫・谷口智行
西村和子・西山 睦・野木桃花
花谷 清・藤田直子

俳壇

2月号

1月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
恩田侑布子

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅲ期」：亀井雉子男・笹瀬節子

俳人の住む町……木暮陶句郎・名村早智子
自句自戒……金子 敦
変わりものの記……ふけとしこ
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……山西雅子
十二か月添削教室……前北かおる

俳句と随想12か月 井上論天・清水和代

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

水明例会

第一例会（浦和）

山城の跡を呑みゆく冬の霧
 冬の霧沈下橋行く旅商人
 冬の霧交互に揺るる舫ひ船
 静止画となりたる曠野冬の霧
 冬の霧見知らぬ町に迷ひ込む
 冬霧や鈍色を増す日本海
 公園に残る酒壘冬の雨
 奥の院の鈴の残響冬の霧
 雪落つる残響高く青空へ
 残心や芯に蜜抱く冬林檎
 山裾にぼつぼつ五軒冬の霧
 冬の霧古き表札あやふやに
 湯の町をべールで包む冬の霧
 友の句集胸に残して庭枯るる

境延昭
 茂木和子

マスミ
 〃
 喜恵
 〃
 節代
 順一
 亮一
 治子
 以上特選
 理恵
 喜恵
 和葉
 節代
 治子
 はるみ

第二例会（浦和）

名匠の残せし猫や小六月
 懐郷も今はまぼろし冬の霧
 冬の霧無口な犬とすれ違ふ
 黄昏やべールとなりし冬の霧
 冬の霧始発電車の発車ベル
 枝に刺す蜜柑残らず雀どち
 山嶺に映ゆる残暉や暮の秋
 枝に残る赤き実ひとつ初時雨
 冬霧や岸辺の鳥のかまびすし

青木鶴城報

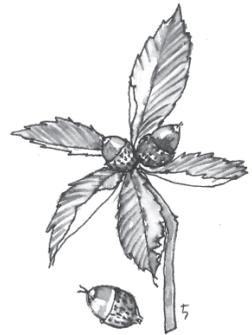
微平
 由紀子
 亮一
 チアキ
 延昭
 稀香
 マスミ
 順子
 和子
 以上特選
 敏江
 いちい
 竺仙
 玲子
 みどり

第三例会（東京）

大群のカラス吸ひ込む冬の森
 山眠る雲の布団は流れゆく
 みかんみかん滴り包み手の中に
 人見知り言ひ訳にして落葉掃く
 村里をまるごと抱へ山眠る
 山眠る挑める者を拒みつつ
 木洩日の丘のベンチや山眠る
 秋雨や三十六峰大文字
 山眠る旅立つ恩師の佇まひ
 朝日浴びグラデーシヨンの紅葉かな
 ザワザワと笹やぶ告げり山眠る
 骨折の夫の術後や蜜柑剥く
 時計の影の長さや山眠る

五明
 曲淵徹雄報

敏江
 りこ
 いちい
 竺仙
 玲子
 峰雄
 道子
 士史
 則子
 サカエ
 弘子
 みどり
 鶴城
 喜久
 〃



半脚踏坐の瞑想に馴れ冬に入る
木の葉散る通小町の能管に

手に受けし木の葉の小さき山の声
木の葉越し遙かの遠に北斗星

一陣の風を象る木の葉雨
鞍馬には晴れぬ魂棲む木の葉雨

来し方を木の葉が埋むる曲輪跡
——以上特選

氣候図に初冠雪の便り載せ
とつとつと告白のやう木の葉散る

茜雲より剥がれる木の葉かな
車椅子デビュの胸に赤い羽根

我一片の木の葉の如し竜飛崎
手書きしか出来ぬ不器用木の葉髪

壺庭はわが浄土なり木の葉焼く
裸婦像の化粧直しや秋うらら

天上大風木の葉しぐれの五合庵
——以上特選

第四例会 (浦和)

境延昭
石井喜恵 報

啄木鳥の響き渡るや野辺送り
文化の日使ひ込みたる広辞苑

お湯注ぐだけの味噌汁文化の日
啄木鳥の音撥ね返す空の張り

家系図に孫書き足すや文化の日
けら叩くほどに晴れゆく山の霧

康世
順子
星歩
雅夫
萬蝶
昇

ふるさとを歌ひお開き文化の日
ペン胼胝に昭和の名残文化の日

懇ろに齡重ねん文化の日
文化の日遠つ祖より継ぐ合掌

サブリメント飲む人の増え文化の日
啄木鳥や頭上明るき山の道

全集の順序を正す文化の日
漫筆をワインに終ふ文化の日

パーバけふフォークダンスへ文化の日
啄木鳥のドラムのやうな音遠く

啄木鳥の瀬音に和するドラミング
静寂なる山路を急かすけらつつき

父母のルートツ偲びし文化の日
啄木鳥やモートルス信号発信中

浄瑠璃の余韻しみじみ文化の日
上野の杜の「国宝展」や文化の日

啄木鳥や厨に刻む千六本
——以上特選

第五例会 (浦和)

梅澤佐江
河野はるみ 報

鷹急降下はるかより来ぬ鳥の群
参道を影踏みのごと七五三祝

息深く吐いて帯解く七五三
花のごと父に抱かるる七五三

妙高山の霧解き放つ鷹一羽
——以上特選

康世
順子
星歩
雅夫
萬蝶
昇

鷹匠の呼気の瞬間鷹飛翔
陽を背に鷹が見つむる鬼瓦

松風に雨の匂へる七五三祝
宮の奥石狐も笑まふ七五三

七五三祝まだ見ぬ孫の笑念ふ
紋付にあぶちやん掛けて七五三

精悍な目を持つ鷹の舞台は空
大鷹の狙ふ一瞬息降下

紅つけて凜と母似の七五三
写真屋の有め笑はず七五三

巫女舞の鈴の音澄めり七五三
破れ蓮共に老いゆく夫婦かな

敗荷や世論調査の円グラフ
門口に雲水の立つ冬隣

急登を制し小春の沖に雲
月並な膳を格上げ酢橋かな

晩成の夢のかげらや敗荷
彩雲を被く朝や帰り花

ビンテージジーンズの膝やれはちす
ヨレヨレになつて嬉しや破蓮

敗荷や虚ろを風の鳴らしゆく
——以上特選

宣子
はるみ
佐江
以上特選

若松例会 (京橋)

正木萬蝶
石田慶子 報

破れ蓮共に老いゆく夫婦かな
敗荷や世論調査の円グラフ

門口に雲水の立つ冬隣
急登を制し小春の沖に雲

月並な膳を格上げ酢橋かな
晩成の夢のかげらや敗荷

彩雲を被く朝や帰り花
ビンテージジーンズの膝やれはちす

ヨレヨレになつて嬉しや破蓮
敗荷や虚ろを風の鳴らしゆく

宣子
はるみ
佐江
以上特選

敗荷の下は竜宮魚の宴
 敗荷の池巡りての別れかな
 競ひ合ひ氣道のこもる菊花展
 冬めくや舞ふは出雲の阿国像
 敗荷や輪廻転生われもまた
 古書市の読めぬ字あまた文化の日
 雲の間に山の端溶くる今朝の冬
 国宝の天守を仰ぐ枯蓮
 敗荷の池にさざ波人に悔
 敗荷の沼そちこちに空を嵌む
 ましら酒金斗雲より楽の音が

はるみ 理恵 紀子 鶴城 千春 慶子 京子 俊晴 ひろこ マスミ 萬蝶

関西例会(大阪)

森本早苗報

にぎり江の水華やかに鴨の陣
 七五三母さん何だかいいにほひ
 金色に染めて銀杏に威厳あり
 のり弁といざゴンドラへ冬紅葉
 石路の黄へ朝の光のまつすぐに
 香を愛でて武骨なくわりん間に置く
 白山茶花ここは平家の裔の里
 恋がらす群れ啼く空や近松忌
 山茶花や二等兵とある古き墓
 立冬の百隻参ず明石の門
 奥嵯峨の秘仏おろがむ片時雨

ゆら女 千津子 早苗 玲子 和子 道子 以上特選 ゆら女 洋子 早苗 玲子

昔話あれこれ 23

雄略天皇の妻問ひ

雄略天皇は、大隈主から献上された犬を「この犬は道中で手に入れた珍しい物だ。これを結納の品とする。」と言つて若日下部王に贈つた。若日下部王は「東の大和から西の河内まで日を背にしてお出でなられたのは恐れ多いことでございます。私の方から直ちに参上してお仕え申しましう。」と申し上げた。天皇が朝倉宮に帰る時、山の上に立ち、歌つた。

日下部の ちの山と
 たたみこも 平群の山の
 こちこちの 山の峽に
 立ち栄ゆる 葉広熊白橋
 本には いたしみ竹生ひ
 末辺には たしみ竹生ひ
 いくみ竹 いくみは寝す

山茶花の処狭しと咲きこぼれ
 絡まりし高層ビルの蔦紅葉
 助手席のくわりんの尻の定まらず
 山茶花の垣根の中の母一人

千津子 さわゑ 和子 千枝子

山茶花やエンディングノート仕上げねば
 手術中のとびかふ言葉身にしみて
 山茶花の生垣長し作務の僧

満耶子 千世子 道子

たしみ竹 たしには率寝す
 後もくみ寝む その思ひ妻 あはれ
 (大意) こちらの日下の山と平群の山の谷間に葉広の大隈が栄立っている。その根本にはいくみ竹が繁り、その梢の方にはたしみ竹が生えている。今日はいくみ竹のように手足を組んで寝ることも、たしみ竹のように確かに寝ることもしなかつた。しかし後には腕を組み交わして寝ようよ。我が愛しい思い妻よ。ああ。)
 * (大長谷王は、皇位継承上の競争者を次から次へと殺した皇子時代を経て、混乱を乗り越え、雄略天皇として即位する。『古事記』の記すところでは、その治世は打って変わって穏やかなものとなつてゐる。右の若日下部王への恋歌は、そのエピソードの初めを飾るものである。) (つづく 丸山マスミ)

各地
句会



光が丘俳句教室 (東京)

神の旅仰ぐ鳥居の高さかな
容赦なくはえを叩きし一茶の忌
煮ごりに昨日の嘘の滲み出る
山茶花のこぼるるままの染物屋

珊瑚の会 (浦和)

綿虫や打ち明けぬまま終へし恋
思ひ出の二色を縫りて毛糸編む
毛糸編む母の背中の丸くなり
深爪の微かな疼き毛糸編む
綿虫を追へば見え来る風の道
日溜りの縁はしいまま毛糸編む
雪婆むかし女衞や人攫ひ
綿虫飛ぶ目鼻の模糊と石地蔵
彩増やしつつ彼奴の毛糸編んである
故里はそろそろ綿虫湧く頃か

はる 康子 典子 理恵
廣子 和葉 かつ子 喜恵 マスミ 水尾 昇 恵子 史代 和子

道ふさぐ綿虫われは逃亡者
りそな俳句会 (浦和)

古びたる母屋あたふた冬構
小春日や開けつ放しの駐在所
木漏れ日はタンゴのリズム小六月
窓の辺に一の字に寝る猫小春
小春日や達者で暮らせと母の文
老妻と手に手を取つて奈良小春
小春日に大河音なく海に入る
助つ人に息子の夫婦冬構

芙蓉句会 (浦和)

花八手清貧のごと武家屋敷
小夜時雨亡父の語りし武勇伝
武士道を語る外人夜長し
寂聴入滅残る紅葉の揺るる日に
武家屋敷裏に回れば石路の花
天つ風小波とあそぶ冬紅葉
室の花武骨な手から絵手紙に

節代 雅夫 曆文 道を 久美子 寛治 建治郎 勲 マスミ 正子 道子 税子 仁 文子 美子

茶の花や龍井朝の畔行けば
冬浅し日本海側は「雨でしよう」
浅草の車夫軽やかに冬浅し

茶の花の陽あたる坂を車椅子
茶の花や潰えし蜂起たどる道

若狭水明会 (若狭)

笠と蓑掛かる庵や秋時雨
栗ごはん一番風呂の父を待つ
栗飯や曲りし指の母の味
舟小屋へ向かふ舟あり秋時雨
湯気香る妻は母似の栗おこは
買物物を済ませ小走り秋時雨
師の声の耳にのこりし秋時雨
想子のあの一句と白眉秋の天

青葉の会 (浦和)

柳散るもうすぐ父母の忌日かな
日向ほこ全て吐き出すわだかまり
全力で冬服詰める旅かばん
全快を知らせるライン暮の秋
柳散る昔瓦斯灯ありし町
柳散る橋渡りゆく白い杖
小春日に納戸全開風通す
恋愛は全く無縁波の花
全山の姿変はるや散り紅葉

多美子 千恵 美子 公子 幸代 ことは 和風 初花 保人 郁子 白鷺 寛久 美紗子 真理 美智枝 美子 啓子 公子 洋子 和子 輝翠

水明熊谷句会 (熊谷)

芭蕉忌や美しき蜂まぎれ込む

つきたての米に小春の温みかな

婆かこみ姥捨民話囲炉裏端

旅先で俄か俳人翁の忌

小春日に光透けたる猫の耳

小春日や水切り三つ五つ六つ

五箇山にけふる民煙ごめ雪

雛の会 (浦和)

新らしき障子運ばる阿弥陀堂

食細き母の寝顔やりんご播る

子の寝息そつと閉むるや白障子

始発待つ靴の先より底冷す

白障子夕日の影のやはらかし

俳句の手ほどき (岩槻)

冬うららペランダに干すベビー布団

客あしらひの上手な女将熟爛を

冬晴や石の蓋する庭の井戸

先客の椅子のぬくもり冬日和

軽やかに釘打つ音や冬うらら

馬の睫を見せてもらひに冬うらら

冬晴や妻の電話に加賀訛

海境の島へ客船冬の虹

冬晴やパワースャベルが会釈する
成長を願ひ参拝冬うらら

働くを忘るる空や冬うらら

伝説の鳩よ飯場よ多摩冬麗

珍客のひ孫迎へて小六月

冬麗の無限の空に憂さも飛ぶ

城跡になに焚く煙冬うらら

野菊の会 (与野)

振り向かぬゴリラの孤独木の葉雨

ゴリラの背中山頭火似よ冬日向

どつしりと居座るゴリラ冬に入る

原生林に眠れるゴリラ皆既食

武蔵野の名残の大樹水澄めり

外に出てよ上野のゴリラ冬うらら

皐月の会 (浦和)

蒼天を背に冬耕の翁の黙

冬耕の日の暖かく妻含む

湖底にはマリモ静かに冬の月

一葉忌庭に使はぬ破れ釣瓶

冬耕や義父の愛せしトラクター

胸中の火種は消せぬ寒椿

寒林の闇を浮かせる湖月かな

鶏頭や咲きて割目のアスファルト

凧や句碑その上の月静か

約束の指切りしたる寒見舞

忠男

美子

卓郎

幸代

桂子

久美子

かつ子

美代子

和子

清子

まな

知子

光子

昭一

光代

美佐尾

瑠子

珪子

順子

紀子

静香

孝磨

暦文

さいち

りんどう俳句会 (浦和)

帰り花今なほ残る古街道

夕時雨地下へと降りる純喫茶

時雨のるや田圃にでんと墓一つ

樹木屋の見立て違へし帰り花

こつこつと遺跡掘る背片時雨

わすれものして戻る庭先返り花

返り花薄日に透けて仄白し

返り花来し方を句に鏤むる

荷を下ろし雄姿現はる銀杏の木

小春日や馬籠の宿を明荷馬

照り曇る机で一句時雨宿

負うてみて分る重荷や虎落笛

裸婦像の半身ぬらし片時雨

芽吹句会 (浦和)

普段着の一汁二菜文化の日

息白し磨き上げたる大玻璃戸

石庭の余白の妙や冬の空

雨に濡れ弥増す艶よ藪柑子

張り込みの刑事襟立て息白し

ランドセル揺らし駆くる子息白し

息白し考の靴で転勤す

石鹸のさまざまなるや文化の日

工場へ出勤の列息白し

寛治

君夫

徹雄

卓郎

利子

弘夫

まり子

サヨ子

紀子

風子

治子

翔太

順子

正子

玲子

修子

富子

千重子

諒明

ひろこ

チアキ

道を

水明澤つくし句会 (大阪)

母偲び姉を偲びて柿吊るす
諍ひの果て白菜の忠刻む
木犀の香に包まれて検査室
寒昂夫の手求む散歩道
にこり江に鳥の寄り添ふ一葉忌

ミモザの会 (横浜)

白壁に映ゆる夕陽や冬浅し
雑穀米かをり仄かに冬浅し
冬めくやガリレオも観し天体ショー
夫の背に母の手縫ひのちやんちやんこ
立冬に一糸乱れぬ飛行隊
冬隣かたち整へ干す帽子
菩提寺の実椿拾ふひかりけり
我が頭より重き白菜届きけり

若鮎句会 (浦和)

図書館の庭に句友と冬浅し
冬浅し月命日の焼団子
山茶花や白杖の人通り過ぐ
起さるのに少しの決意今朝の冬
黄昏れて白き山茶花浮きいでし
街路樹の色とりどりや冬浅し
天目の袖葉の黒ひめつばき
帰り花口の達者は親ゆづり

洋子
人美
智恵子
きりり
ゆら女

栄子
玲子
萬蝶
亜弥子
詠子
慶子
史代
千春

拓真
さなえ
亮一
芳春
香音子
稀香
月香
鶴城

野ばらの会 (浦和)

木枯や鎮守の森にトトロ来る
凧にブロンズ像の身じろがず
ランナーの追風となれ凧よ
仄暗き内庭でらす花八手
砂利道によるけし先の花八手

水明松本句会 (松本)

行く秋や思い出ばかり追ひかける
こたつ出す潜つて遊んで昼寝する
りんごはね一口かじるとおいしいぞ
秋の夜はゆつくり浸かる風呂ナイス
夫の忌や滔々と行く秋の川

花衣の会 (浦和)

裸電球ゆれて華やぐおかも市
大江山鬼の棲む家に石路の花
水盤に山茶花の白こぼれけり
賽銭が後からくるお西様
静かさや石路の花咲く寺の庭
たかな俳句会 (川口)

夏江
茂子
栄子
秀子
みき子

陽子
マリス
まさし
玲子
寿子

みよ
みち
峯雄
治
章嘉
久美子
のり子
福美

冬ぬくし御番所茶屋で食む団子
気配なき公園事務所黄落期
深川は昔留めず芭蕉の忌
松手入終へたる場所の松の影
我が影の長きに語る冬田打

和歌山水明句会 (和歌山)

散る木の葉ひとつふたつは鳥になり
冬紅葉戸籍にひとり男の子ふゆ
銀杏黄葉スビード落す走行車
治療後の瘥消えてゆく今朝の冬
耳たぶの手触りありぬ姫椿
山茶花や蕾に願ひ託したき
遠来の友は菊花の香り連れ
白杖を駅へみちびき姫椿

柿の木塾 (浦和)

柿のかぶさり来るや蕪汁
食べ頃の白き膨らみ蕪蒸し
海鳴りを遠音に加賀の蕪餅
初霜やうるさい奴に生返事
のはほんど過ぎし一日や蕪汁
初霜やサラダにはらり粉チーズ
酢を注せばほのと紅さす蕪漬
蕪料理下手で蕪を丸かじり

小麦
義子
鶴城
水尾
静香

和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
洋子
廼代

水尾
俊晴
節代
和葉
恵子
かつ子
和子

神戸大池句会 (神戸)

百舌鳥猛る太閤さんの湯殿跡
文化の日還暦の子に祝盃を
熱もなし調子良いけど玉子酒
菊香る隅槽のみ残る城

早苗
礼子
千津子
玲子

円卓の会 (浦和)

はつふゆや地下鉄出口あめにほふ
盛り上がるもぐらの通路小六月
江ノ電のワイパー一本夕時雨
表札は親父の名前花八つ手
まばらなる昭和の硬貨酉の市
古民家は冬の日のいろ柿落葉
告白の賞味期限や返り花
濡縁に猫の足跡初しぐれ

静香
輝修
道を
亮一
翔太
月を
鶴城

めだか句会 (浦和)

鷹匠の腕に重たき爪の主
鷹を追ひ推理小説打ち捨てり
鯛焼の裏表なき心かな
窓霜やサツシの鍵に指止めて
びしよ濡れの靴や笑顔の霜の朝
霜の夜慌てワセリン探しをり
霜月や浅間の峰に雲かかり
大霜や一人味はふキムチ鍋

知子
十三子
六弦
謙一
敦子
はるみ
宏子
忠夫

若鷹や開聞岳を背に置きて
森林限界小さき草葉に霜の花
ご自慢の鷹の振り袖バックシヤン

水明鬼石句会 (鬼石)

裸婦像を守るや落葉の色さやか
大型のバスの園児や冬桜
紅葉の赤いじゆうたん寝転びし
新そばや五年ぶりに友來たる
上州の風にみがかれ冬桜

新樹の会 (浦和)

冬めくや氷川神社の絵馬の音
襟を立て道行く人や冬めける
冬ぬくし変奏曲の譜面台
冬めくや光る山頂輝けり
窯変を兆す炎や冬の雷
冬めきて行き交ふ足の速きかな

樺の会 (浦和)

七五三着くづれ直し参詣す
三代が揃ひて祝ふ七五三
三歳もぐつと胸はる七五三
パパの休日一家総出の七五三
着飾りてズックで歩く七五三
人住まぬ荒れたる庭に帰り花

月を
鶴城
美智
和子
ナヲ子
洋子
聡子
紀子
風子
修
清吉
平通
徹雄
鶴城
裕誌
彰二
克之
富子
文子
富美子

七五三児等に祝詞の長すぎて
子供らの未来図無限七五三
帰り花我が人生のかくありなん
七五三目を細め見る両祖父母
もう見せに来る頃かなと七五三
振袖でセンター真似る七五三

千重子
敦子
亮子
妙子
朋子
治子

「第十七水明抄」(追加注文)

「第十七水明抄」は、会員皆様のご協力によって、昨年十一月に無事に刊行することができました。ありがとうございます。

尚、残部が何冊かありますのでご入用の方は、水明発行所までお問合せ下さい。一部三五〇〇円です。

水明発行所
☎ 〇四八―八二二―四七四一

新春俳句大会のお知らせ

- [日 時] 令和5年1月30日(月) 12時 受付・投句
12時45分 開会予定
- [会 場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室
(JR浦和駅東口前パルコ10階)
- [投 句] 「初明り」「歯染」各1句、計2句
- [参加費] 1,000円
- [申 込] 1月6日(金)から受付開始。23日(月)までに会費と申込書(1月号に添付)を添えて発行所総務部宛にお願いいたします。

年当初の新春俳句大会です。日時をご確認の上、奮ってご参加くださいませ。

※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。

※なお、コロナ感染症の状況によっては、内容等を変更する場合があります。

担当：事業部

水明忌のご案内

- [日 時] 令和5年2月25日(土)12時 受付・投句
12時45分 開会予定
- [会 場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室
(JR浦和駅東口前パルコ10階)
- [投 句] 「春浅し」(「浅き春」「浅春」「春浅き」「春浅く」可)、
「当季雑詠」各1句、計2句※受付時にお投句ください。
- [参加費] 1,000円
- [申 込] 2月1日(水)より受付開始、17日(金)までに会費を添えて発行所総務部宛にお申込みください。

「水明忌」は、長谷川秋子第2代主宰、星野紗一第3代主宰、星野光二第4代主宰の忌を修する日です。日時をご確認の上、奮ってご参加くださいませ。

※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。

※なお、コロナ感染症の状況に拠っては内容等を変更する場合があります。

事業部

令和5年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明誌」及び外部に
発表した作品は不可。
- 締切** 令和5年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員 (10名)

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	井口俊晴
保坂翔太	青木鶴城	日高道を
曲淵徹雄		

新珠賞推選委員 (5名)

檜鼻ことは	大橋廸代	茂木和子
椎野美代子	波多野寿子	

若狭句碑めぐりバスツアー PART IIのご案内

水明創刊 85 周年の記念事業である「鳥津城子句碑」建立を契機に催行した「若狭句碑めぐりバスツアー」から 6 年が経過しました。その後水明創刊 90 周年・通巻 1100 号、鳥羽谷通巻 200 号などの慶事が相次いだことから、多くの会員の皆様から水明ゆかりの地を訪ねる再度のツアー催行を望む声が寄せられています。そこで水明通巻 1100 号の記念事業として、下記の通り「若狭句碑めぐりバスツアー PART II」を実施することといたします。未だ若狭に行かれたことのない方、この機会に再訪をとお考えの多くの方々のご参加をお待ちしています。爽やかな若狭の初夏を、一緒に心ゆくまで楽しみましょう。

[記]

【期 日】 令和 5 年 5 月 29 日(月)、30 日(火)、31 日(水) 2泊3日

【交通機関】 大型バス 1 台

【募集人員】 40 名

【担 当】 バスツアー実行委員会、事業部

【参加費】 新幹線利用に比べ格安ですが現在検討中、2月号にてお知らせします。

【旅 程】

①発着地 さいたま市浦和区仲町・「玉蔵院」前

②ルート 首都高速・東名高速・北陸自動車道（復路はこの逆）

③宿泊施設

【第 1 夜】 三方五湖水月湖湖畔「きらら温泉・水月花」

☎ 0770 - 47 - 1234

* 翌朝クルーズ船で、初夏の三方五湖を巡ります。

【第 2 夜】 御食園(みけつくに)・小浜市内「ホテルせくみ屋」

☎ 0770 - 52 - 0026

* 翌朝、小浜お魚センターで海の幸のお買い物を楽しめます。

④観光地 三方五湖……レイククルーズ

鳥羽公園……「鳥津城子」「澤本知水・山本嵯迷」「宇田翠保」の句碑

瓜割公園……「長谷川かな女」「長谷川秋子」「星野紗一・明世」の句碑

ほか、小浜お魚センター、熊川宿、有名社寺・旧蹟、若狭箸工房など

◆本号以降、順を追って案内を掲載しますので、欠かさずご覧下さい。

主 宰 山本鬼之介
実行委員長 五 明 昇

風 声

○俳句四季十一月号——「季語を詠む」欄

金婚式の祝の宴のセロリ拒否

鬼之介

○現代俳句十一月号——「現代俳句年鑑2022を読む」欄
政野すず子氏の感銘十句抄に

横断の拳手真つ直ぐに風薫る

宮崎紫水

○現代俳句十一月号——「現代俳句の風」欄

裏山は古墳の森よ鴉日和

鈴木和子

初ものの松茸飯や夫婦椀

青木鶴城

一切れは考一切れは疵へ梨を剥く

越田栄子

早口の願ひ置き去り流れ星

杉浦理恵

悠久の古墳を望む新松子

原田秀子

化野の静寂領する秋の蟬

丸山マシミ

長き夜や寝息うかがふナースの灯

由良ゆら女

○現代俳句十一月号——「現代俳句の風—秀句を探る」欄

江良 修氏の感銘十句抄に

悠久の古墳を望む新松子

原田秀子

○現代俳句十一月号——「新入会員記念作品」欄

このさくらありしかば詩を始めけん

吉川拓真

師の忌日「春眠忌」てふあたたかし

ク

○天塚（宮谷昌代主宰）十一月号——「珠玉一句」欄

折鶴の羽に入魂秋立つ日

鬼之介

○くちら（中尾公彦主宰）十一月号——「受贈俳誌美術館」欄

古書店の叩きのリズム秋の昼

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）十一月号——「受贈誌拝見」欄

折鶴の羽に入魂秋立つ日

鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）十一月号——「受贈俳誌紹介」欄

折鶴の羽に入魂秋立つ日

鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）十一月号——「受贈誌御礼」欄

初に見る隣家の佳人むくげ垣

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）十一月・十二月号——「他誌拝見」欄

鈴虫に留守居を頼む独り者

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）十一月号——「諸家近詠」欄

少将といへば「深草」秋螢

鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）十一月号——「諸家近詠」欄

炎昼に訳の判らぬ人の列

鬼之介

○沖（能村研三主宰）十一月号——「沖の沖」欄

筆持てば永字八法白木槿

星野和葉

○罨（山本一步主宰）十一月号——「受贈誌の一句」欄

蠟石の線路どこまで日向水

由良ゆら女

（日高道を抄出）

水明の運営組織 (令和5年1月1日より)

主 宰 山本鬼之介

運営幹事長 網野月を

編集長 大村節代

常任運営幹事 網野月を 大村節代 石山かつ子 石井喜恵

井口俊晴 日高道を 青木鶴城 保坂翔太

曲淵徹雄

運営幹事 大橋廼代 檜鼻ことは 椎野美代子

各部

総務部 [会計、会員に関する管理事務、各行事の受付事務、水明誌等の発送、発行所管理ほか庶務全般]

部長・日高道を 石井喜恵 大場順子
菅原真理 岡田宜子

事業部 [水明俳句会各行事の企画・運営・実行、地方支部会員との連携、新規会員拡充の企画・運営・実行、ホームページの企画・運営・実行、俳句教室の企画・運営・実行、会員研修の企画・運営・実行、広報活動の企画・運営・実行、渉外関係事務、編集企画]

部長・網野月を 副部長・青木鶴城
保坂翔太 曲淵徹雄 河野はるみ
反町 修 小林京子 吉川拓真

編集部 [水明誌発行、全国大会資料の校正、水明誌の発送、その他編集関連用務]

部長 大村節代 石山かつ子 丸山マスミ
大塚茂子 野田静香

事務局 [常任運営幹事会の議案と議事録の作成]

局長 井口俊晴

監 事 [水明俳句会及び水明発展基金の会計監査]

山中みどり 新 暦文

水明発展基金役員 (令和5年1月1日より)

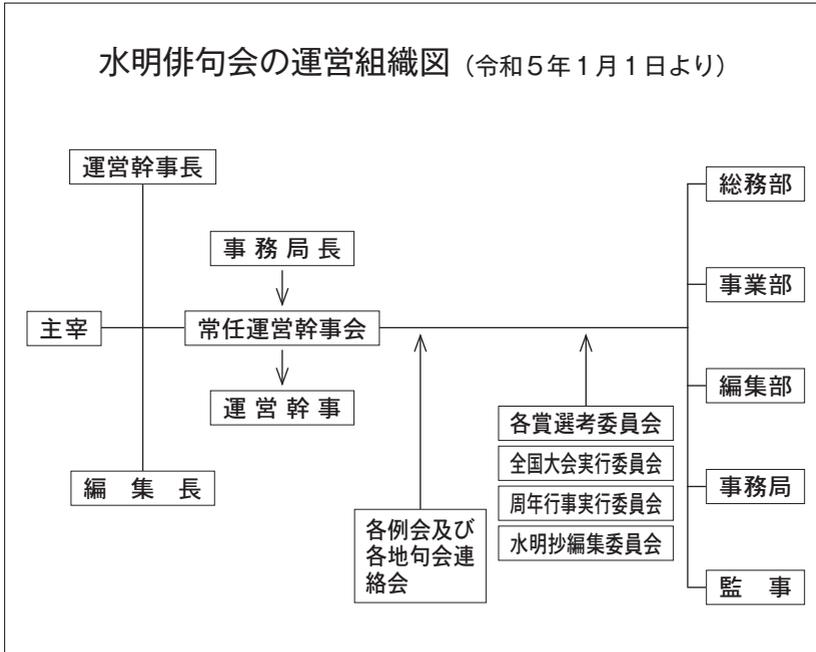
会 長 山本鬼之介

幹 事 網野月を 大村節代 日高道を 石山かつ子

井口俊晴

監 事 山中みどり 新 暦文

水明俳句会の運営組織図（令和5年1月1日より）



水明俳句会各賞選考委員会（令和5年1月1日より）

水明賞				
主 宰	網野月を 井口俊晴 曲淵徹雄	大村節代 日高道を	石山かつ子 青木鶴城	石井喜恵 保坂翔太
季音賞				
主 宰	網野月を 井口俊晴	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
かな女賞				
主 宰	〔運営幹事長と編集長の同意を得る〕			
新珠賞				
主 宰	網野月を 井口俊晴 曲淵徹雄	大村節代 保坂翔太	石山かつ子 日高道を	石井喜恵 青木鶴城
各地区委員：大橋 旭代 檜鼻ことは 椎野美代子 茂木和子 永野史代				
鼓笛賞				
大村節代 〔主宰と運営幹事長の同意を得る〕				
山紫賞				
網野月を 〔主宰と編集長の同意を得る〕				

令和5年主要年間行事等予定表

令和5年1月1日

行事名	日程	誌上案内	開催場所等	主担当	支援	備考
新春俳句大会	1月30日	11月・12月・1月号	浦和パルコ10階第13集会室	事業部		
例会・句会指導者および幹事の会	1月30日(午前中)		浦和パルコ10階第13集会室	常任運営幹事会	事業部	※案内
水明忌	2月25日	12月・1月・2月号	浦和パルコ10階第13集会室	事業部		
春の吟行会	4月上旬	2月・3月号	高鼻CC大会議室	りんどう俳句会	事業部	
若狭句碑めぐりPART II	5月29日～31日	2月・3月・4月号	三方五湖、鳥羽公園、瓜割公園ほか	ツアー実行委員会	事業部	
令和5年全国大会	6月25日(日)	3月・4月・5月号	さいたま共済会館	実行委員会		
水明夏行	7月29日～31日(案)	6月・7月号	浦和パルコ10階	事業部		
りんどう忌	9月30日(案)	7月・8月・9月号	浦和パルコ10階	事業部		
水明塾	10月29日(案)	8月・9月・10月号	浦和パルコ10階	事業部		

(注) 予定表の詳細未定については、月日・会場を変更することがあります。

本行事予定表にない日帰り吟行会などについては個別に対応する。

コロナ感染症の対応により予定を変更することがあります。

※「水明忌」は如月忌、紗一忌、光二忌を統合した忌日。

令和5年主な兼題応募句等募集について

令和5年1月1日

募集行事名	誌上案内	応募用紙等	応募締切日	備考	主幹
令和5年全国大会	3月・4月・5月号	3月・4月・5月号	5月9日		編集部

水明例会および各地句会・教室のご案内

(令和5年1月1日)

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
第一例会	第1日曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 048-886-1860 境延昭 048-686-2281
第二例会	第3金曜 13時	本所ビッグシップ (東京・本所)	網野月を	山中みどり 03-3625-2435 青木鶴城 048-829-2776
第三例会	第1月曜 13時	京橋区民会館 (東京・京橋)	山本鬼之介	五明昇 048-858-7155 曲淵徹雄 048-864-4018
第四例会	第1木曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 048-686-2281 石井喜恵 048-683-0801
第五例会	第3火曜 13時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 0480-22-4011 河野はるみ 090-9008-6422
若松例会	第1土曜 13時	京橋区民館 (東京・京橋)	山本鬼之介	正木萬蝶 045-491-8773 石田慶子 03-3853-2048
関西例会	第3日曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	大橋廻代	森本早苗 078-583-6225
水明鬼石句会	第3水曜 13時30分	藤岡市鬼石公民館 (群馬・鬼石)	野口和子	野口和子 0274-52-3418
水明小川 俳句に親しむ会	第1月曜 13時	大塚コミュニティ(セ) (埼玉・小川)	勉強会	越田栄子 048-525-5835
水明熊谷句会	第4火曜 13時	熊谷市立 コミュニティー(セ)	山本鬼之介	大塚茂子 048-596-1538 越田栄子 048-525-5835
雛の会	第2木曜 13時	水明発行所	石山かつ子	梅澤佐江 0480-22-4011
櫻蔭句会	第2水曜 9時30分	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	丸山マスマ	阿部幸代 048-974-1704
野菊の会	第2水曜 13時	下落合公民館 (さいたま・中央区)	椎野美代子	下川光子 048-857-2120
芽吹句会	第3金曜 13時30分	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	日高道を 090-2122-1223
柿の木塾	第3金曜 13時	水明発行所	勉強会	茂木和子 048-886-1860

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
歩の会	第1金曜 12時	水明発行所	勉強会	茂木和子 048-886-1860
りそな俳句会	第2火曜 18時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	星野和葉	池田雅夫 048-885-7276 日高道を 090-2122-1223
山茶花	第1水曜 10時	本太公民館 (さいたま・浦和区)	星野和葉	後藤綾子 048-885-3785
櫟の会	第3水曜 13時	常盤公民館 (さいたま・浦和区)	星野和葉	柚木治子 048-831-6158
珊瑚の会	第4木曜 13時	水明発行所	研究会	大村節代 048-862-9658
芙蓉句会	第3金曜 9時30分	六辻公民館 (さいたま・南区)	山本鬼之介	山戸美子 048-677-8775
たかなな 俳句会	第3水曜 13時	芝二丁目集会所 (埼玉・川口)	山本鬼之介	野田静香 048-261-1858 青木鶴城 048-829-2776
きざき サークル	第3水曜 14時	木崎自治会館 (さいたま・浦和区)	五明昇	森和子 048-832-6565
ひまわり句会	第1木曜 10時	草加アコスビル (埼玉・草加)	勉強会	石田慶子 03-3853-2048 日吉亜弥子 0475-55-0395
花ごよみ句会	第3月曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	星野和葉	山下ユリ子 048-861-6685
野ばらの会	第2水曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	星野和葉	緒方みき子 048-881-8643
皐月の会	第2金曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	渋谷きいち 048-832-5319
青葉の会	第3月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	梅澤輝翠 090-9825-3415
新樹の会	第4月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	青木鶴城 048-829-2776
鶴川山百 合句会	第4火曜 13時	玉川学園文化(セ) (東京・町田)	町野広子	鈴木玲子 044-952-3643
ミモザの会	第2火曜 13時	アートフォーラム あざみ野(横浜)	勉強会	福田千春 045-901-6032
水明松本句会	第4週末	波多野寿子宅 (長野・松本)	波多野寿子	波多野寿子 0263-47-8937
若狭水明会	毎月20日	鳥羽公民館 (福井・若狭)	檜鼻ことは	鳥羽和風 0770-64-1211 鳥津初花 0770-64-1626

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
水明 滂つくし句会	第2土曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	由良ゆら女	由良ゆら女 06-6933-0689
和歌山水明句会	第2木曜 13時	太田自治会館	大橋 勉代	大橋 勉代 073-471-5582 西浦千枝子 073-471-7929
神戸大池句会	第2火曜 13時	神戸市勤労会館 (神戸・中央区)	勉強会	田寺 玲子 078-914-0341 森本 早苗 078-583-6225
光が丘俳句会	第3火曜 13時	光が丘区民(セ) (東京・練馬)	勉強会	石川 理恵 03-3938-0208 水落 守伊 03-3970-2723
りんどう俳句会	第2木曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	大場 順子 048-647-5157 染谷 風子 048-685-2963
俳句の手ほどき 岩槻教室	第1・3水曜 13時	岩槻駅東口 コミセン	山本鬼之介	石山かつ子 048-757-2484
コクーンシティ カルチャー 俳句教室	第2・4金曜 13時30分	コクーンシティ カルチャー (さいたま新都心)	境 延昭	五明 昇 048-858-7155 井口 俊晴 048-824-2024
あゆみの会	第2・4木曜 13時	下 与 野 コミュニティ(セ)	境 延昭	鈴木 藻好 048-825-0158
蛸 蚪 の 会	第3月曜 13時	イートピア与野 集 会 室	網野月を	岡田 宣子 048-825-6502 青木 鶴城 048-829-2776
円 卓 の 会	第3土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	網野月を	青木 鶴城 048-829-2776
繭 の 会	第1月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	網野月を	小林 京子 048-865-8158 青木 鶴城 048-829-2776
若 鮎 句 会	第2土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	網野月を	持永 喜夫 048-825-7605 青木 鶴城 048-829-2776
めだか句会	第4土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	網野月を	小田 美智 090-9687-1227 青木 鶴城 048-829-2776

後記

明けましておめでとう

(ごさいます)

昨年は、新型コロナによりまして、一月の「新春俳句大会」、二月の「水明忌」、三月の「春の吟行会」が中止となりました。

しかし、二年間練り延べになっていた「水明創刊九〇周年記念祝賀会」と「水明一〇〇号記念全国大会」を合せて、七月六日に中村和弘現代俳句協会会長はじめ来賓の方々をお招きして祝しました。

九月には「りんどう忌」を行ない去年最後の行事は十一月の「水明塾」でした。水明塾は第一部が講演会、第二部は全句講評講座を行いました。

第二部は十二月号に掲載し、一部の後藤章氏の講演会は、氏が加筆して下さり今月号に掲載しました。私には難しいのですが、どうぞお読みになって下さい。

今年もまた、新型コロナ、特にオミクロン株が猛威をふるうようです。その上、寒さが厳しいようなのでお気をつけ下さいませ。

寒さが厳しい時には「四つ首」を温めなさいと言われました。え、首が四つ?と思いました。

何うと、いわゆる「首」と「手首」「足首」それに「くびれ(お腹)」だそうです。「首」「手首」「足首」はそれぞれ、マフラー、

手袋、靴下で暖めて、お腹はホッカロンで暖めるのが良いとの事です。新型コロナ、そして寒さ、やれやれですね。

水明の行事は、中止もありましたが「水明」誌は一号も休まず発行しました。その上、十一月には「第十七水明抄」の編集発行をしました。正に一年間、休む暇がなかったので編集部全員が、いささかバテましたが、新年を迎え心も新たに、皆で頑張ろうと思えます。

今年もよろしくお願いします。(節代)

今月のはてな?

- 素面(すめん)
- 稀観本(きこうほん)
- 佳宵三更(かしょうさんこう)
- 舳斗雲・金斗雲(きんとうん)
- 七五三祝(しめいわい)
- 鎌鼬(かまいたち)
- 蒼鷹(おたか・もろがえり)
- 倭歌(やまとうた)
- 逆悪(さやくあく)
- 喇嘛僧(らまそう)
- 墨刑(ぼくけい)

74 60 40 23 22 21 20 19 8 8 8 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日:(月・火・水・木・金)
時間:12時半~午後4時半
(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み
(上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内をお願いします。)

水明

令和五年一月号
通巻一〇八号
令和五年一月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人 山本鬼之介

印刷所 中央美版

「新春俳句大会」参加申込書

〈申込締切 1月23日(月)〉

新春俳句大会 1月30日(月)	会費 ¥1,000円	出席します
--------------------	------------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2023年1月 日

住所	〒	
氏名	電話	()

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)
水明俳句会

季音抄

山本鬼之介

文化の日電子辞書より虚子の声
豊かなるダム湖に集ふ鴨百羽
木の葉散る通小町の能管に
散る木の葉ひとつふたつは鳥になり
耳聴く夫の靴音聞く霜夜
奥嵯峨の秘仏をろがむ片時雨
ホテルの灯消えて出揃ふ冬銀河
ならぬひとへ私語めく木の葉降る
手に受けし木の葉に小さき山の声
天鷲絨の淑女の帽子そぞろ寒
霜月やまたたく星の無言劇
のり弁といざゴンドラへ冬紅葉
敗荷や世論調査の円グラフ
墨堤に荷風の背中空つ風
工場へ出勤の列息白し
敗荷の下は竜宮魚の宴
帯解や簪ゆらす杜の風
深川は昔留めず芭蕉の忌

椎野美代子
島津初花
鈴木康世
十倉和子
永野史代
田寺玲子
井上燈女
正木萬蝶
大場順子
内田恵子
池田雅夫
森本早苗
石田慶子
曲淵徹雄
日高道を
河野はるみ
野田静香
青木鶴城

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

忍城の歴史を今に水の秋
 朝寒や両手で挟む椀の底
 紅葉且つ散るをスケッチ点描画
 湯の街の輪郭くづす秋時雨
 発条のブリキの玩具蔵の秋
 逆悪や破れジーンズ秋深む
 すれ違ふ風に乗りたし刈田道
 朝寒や杉玉揺らす里の風
 切り返す言葉代りの新走
 一条の箱根古道や秋澄めり
 蒼穹や湿原すべて草紅葉
 ジオラマの列車目で追ふ暮の秋
 秋晴の銀座マロニエ通りかな
 逆さ富士散りし紅葉に色どられ
 狛犬の丸き背中を秋時雨
 脱藩の竜馬菊師に水貫ふ
 上顎の欠けし狛犬秋の風
 順風も逆風も舞ふ風の盆

越田栄子
 新 曆文
 梅澤輝翠
 菅原真理
 清水桂子
 篠崎紀子
 阿部幸代
 池田珪子
 新井のり子
 山岸久美子
 反町 修
 丸屋詠子
 小林京子
 霜多光代
 元田亮一
 横山君夫
 染谷風子
 渋谷さいち

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂境 木和子 延 昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	青木 鶴城 太田 絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇 曲 淵 徹 雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境 延 昭 石 井 喜 恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はる み
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬 蝶 石 田 慶 子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋 勉代	森本 早苗

水 明 令和五年一月一日発行 毎月一日発行

(第九十六卷 第一号) 定価 一〇〇〇円